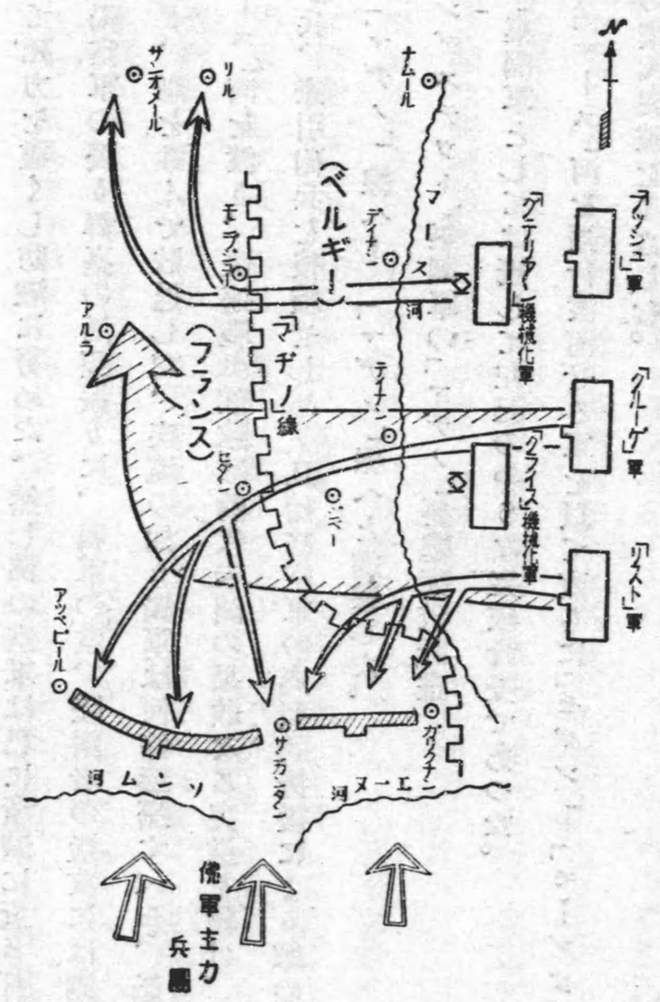


先頭機極化兵團である「グデリアン」—「クライス」軍は、何れも裝甲師團と機械化兵團とからなつてゐる。

そこで「マヂノ」要塞突破後は、機械化兵團は直ちに北進して「フランダース」及び「アルトア」に向つて急轉向して、英佛軍を包圍する「クルーゲ」—「リスト」軍は專ら南方に對し佛主力軍の北進に備へ、「フランダース」殲滅戰軍の掩護をするのであつた。

「ヂベー」要塞の攻略（要圖參照）

「ヂベー」要塞は佛、白國境の要衝にあつて「マヂノ」要塞の前進據點であつて、是が非でもこの要塞を攻略せねば北佛國境に侵入することが出來ぬ所である。

この要塞は三方「マース」河に圍まれ南部は山と云ふ天嶮的の要害で、獨軍としても其の攻撃は中々容易でない。

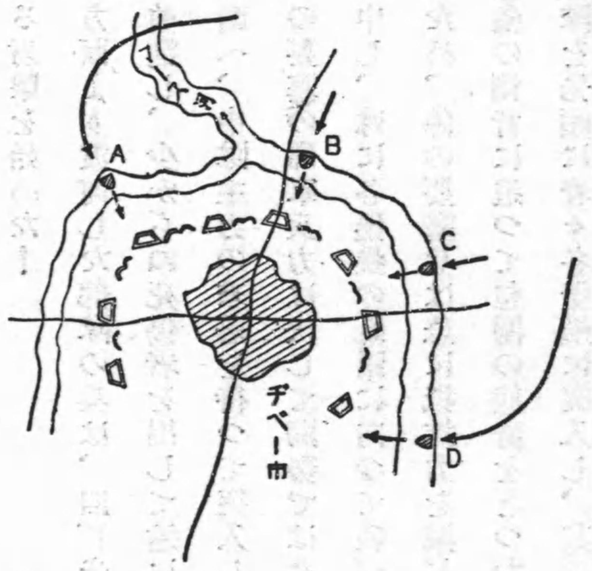
三方面より「マース」河を渡りて要塞に肉迫す。

「ヂベー」要塞は三方面が河幅約百—百五十米位の「マース」河に圍まれてゐて敵前渡河

「ヂベー」要塞攻略要圖

をせねば、容易に近づけぬ要害をなしてゐるのみならず、其の南一帶は峻嶮な山地で、いはば隘路の喉首のやうな關係をなしてゐる。獨「クルーゲ」軍の一部は「ティナン」附近で「マース」河を突破し、全軍意氣凛然として「ヂベー」要塞に差し迫つて來た。

待ち構へてゐた佛軍はこゝを先途と銃砲火を浴びせて、其の渡河を妨害した。獨軍はA、B、Cの三ヶ所から空軍と砲兵の掩護射撃で獨特の浮袋舟を一齊に浮べて渡河を始めた。佛軍の射撃のため若干の浮袋は河底に沈んだ、乗組の兵員は皆水中に飛び込み、敵側の土手に迹りついて陸に躍り上がつた。佛軍要塞からは激しい銃砲火を渡河部隊目がけて浴びせかけ、水面は彈丸の跳飛



で一面に水煙りが立ち上がつた。勇敢なるC渡河地區より前進した第五中隊の一小隊長は僅かに部下五名と共に機關銃一銃のみを持つて、要塞の銃眼近くに肉迫して猛烈なる射撃を始めた！

B方面より渡河した部隊の兵は、四百米許りのひろ〳〵とした牧場を何らの遮蔽物なく前進し、少からぬ死傷者を出して遂に敵堡壘の死角を利用し、撃ち出す敵の銃砲火に耐へ、中隊主力の來著を待つて突入した。

この要塞の佛軍兵力は決して弱勢ではなかつたが、獨の戰車爆撃砲彈は正確に次々と命中し、殊に各堡壘の銃眼に向つて我が砲兵は直接砲火を浴びせ、目潰し射撃を行ふたため、佛の要塞兵は急に抵抗力を減じた。同時にD方面から獨軍の一隊は「チベー」堡壘の側背に迫つて包圍の態勢をとつた。かくして獨軍は急に攻撃進捗して、機關銃部隊を先頭に着々各堡壘に突入し、其の戰果を擴大した。佛の守備軍は右往左往に混亂し、一部は山傳ひに遁走を始めた。要塞に對する獨軍最後の總攻撃は始まり、猛然たる爆彈の降下、轟然たる重砲の響きは全要塞を震核させて、獨砲兵の一榴彈は佛軍司令部の眞中に炸裂し、幕僚も信號兵も吹き飛んで、辛じて司令官だけは瓦斯「マスク」—「ケース」のため榴彈の破片を防いで助かつた。然し獨軍の峻烈なる攻撃のあとは各砲臺、堡壘共にひつそりと鳴りを靜め、唯若干の手榴彈兵のみが各所で奮鬪したが、それだけでは、獨軍血河の勢を喰ひ止めることは出來なかつた。

後續せる第三、第四部隊も續々到着し、攻撃は愈々拍車をかけ、焦り猛つて突撃となつた。佛軍も相當頑强に抗戰したが片つ端から崩れ出し、一部の降伏を嫌ふ敵兵は算を亂して敗走し、夕刻頃には全く陷落して獨逸國旗は翻つた。佛「モロッコ」兵約七百餘人は捕虜となつた。

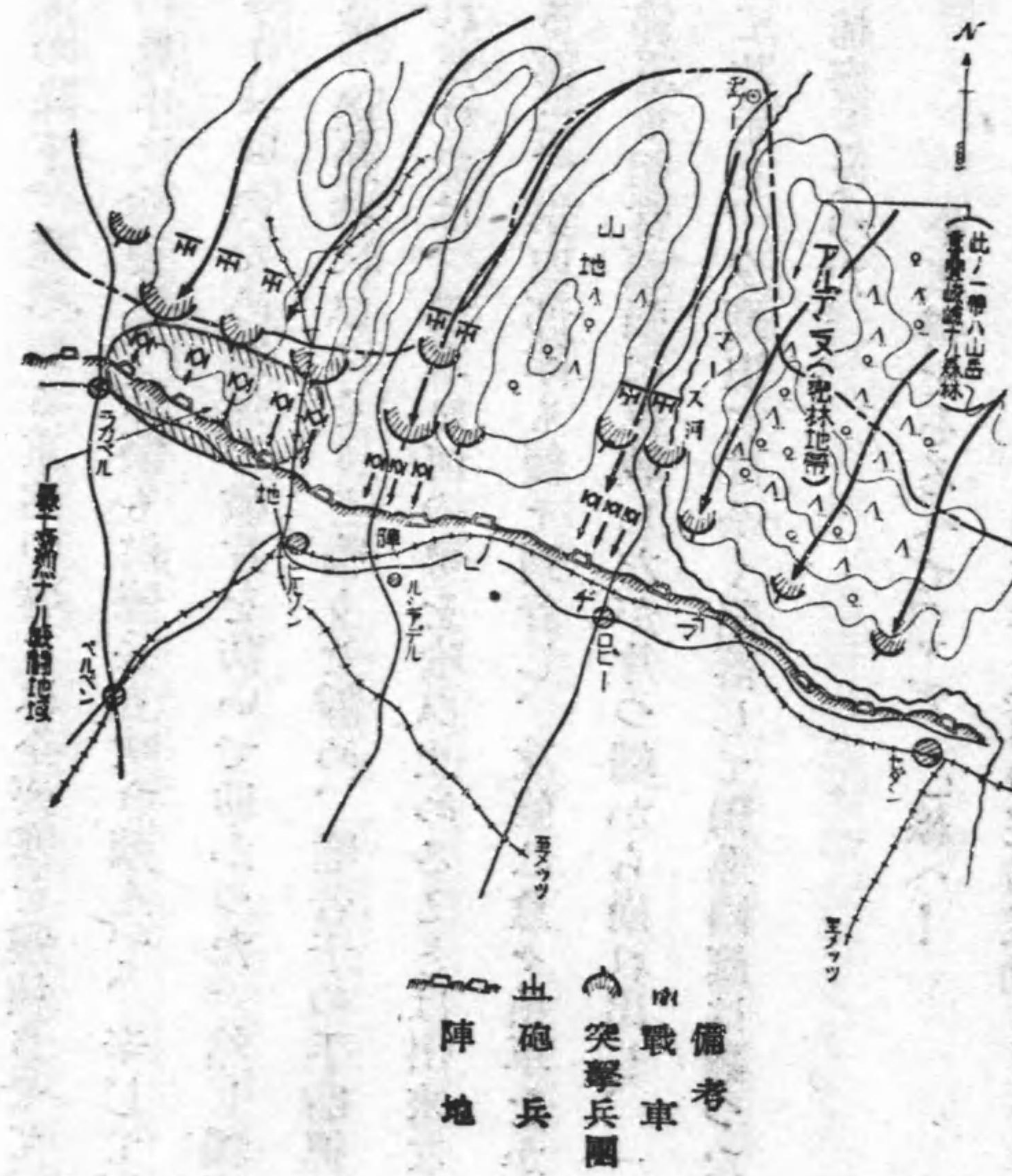
全軍轡をそろへて「マヂノ」線へ！

「セダン」—「モーブジエー」間約百粁正面の突破成功！

佛蘭西が難攻不落と頼んだ「マヂノ」要塞、巨億の金を投じ十年の長き日時を費し築き

上げたる鐵壁鋼陣！獨軍の猛攻は壓倒的新戰法で、僅かに二日間で突破された。世

「セダン」附近の地形と獨軍攻撃部署



人は驚異の眼で其の事實を疑ふた位、一大奇蹟の武勳であつた。一體如何なる神謀鬼策がこの强行突破を成功せしめたであらうか。

獨軍最高統帥部がこの突破正面を選んだのは、戰略目標である佛國首都巴里を一擧に屠るにも、將た又今次實行したやうに白耳義にある英、佛軍と、佛國内にある其の主力軍とを中斷し、英軍を北海に突き込む大包圍陣を作るにも極めて都合がよいので、當然の作戰指導と云へるだらう。殊に此の地方は圖の如く山と森林で、而も山岳重疊して行動が困難の上に、人跡未踏ともいはれてゐる大密林があるので、佛軍としては此の正面は極めて重要な所ではあるが、今述べたやうに如何に獨軍でも、軍隊としては大部隊の通過は不可能である。況んや機械化兵團の如きは、夢にも行進し得ない所謂天然の大障碍であると判斷した。山あり森あり河あるを頼みとして、平素から餘り堅固な築城はしてゐない。漸く陣地線の主なる所に「トーチカ」を配置し、之に野戰築城を添へた程度であつた。これを獨逸は平時偵察で知り拔いて居た。恐るべきは油斷

と依頼である。それにしても、かくも跪く突破されたのは、獨逸の空、陸よりする科學の威力が一氣に踏み躙り得る程弱體であつたか、或は獨の急降下爆擊に手も足も出し得ず、そこへ獨の突破兵團の疾風的突進に一たまりもなく壓倒されたのか、これについては姉妹篇として曩に公刊した「獨逸電擊戰の展望」にも一通り觀察した點を述べて置いたが、かさねて述べて見れば大體次のやうな理由で、呆氣なくも怒濤の勢ひに一押しで崩壞したのではあるまいか。

一、「セダン」の北側一帶は山又山の連標峯(高五—六百米)地に、剩へ一大密林地帶をなし、單獨人でも通行困難と思はるゝ大障碍地である。佛國としてはこの天嶮を依賴して、よもやこの地區から獨軍の大部隊が進出するものとは全然豫期しなかつたらしい。所が獨逸はさすがに平時偵察の結果、この森林を突破するために二、三年前より東「プロイセン」の「ポメラニヤ」原始林で森林戰を數十回演練し、あらゆる體驗を試練し、確信を以て之を實地に應用したもので決して偶然の成功ではない。佛軍としては思ひもよらぬ彼方より忽然として獨軍が天降つたやうに現はれたので、第一精神的に壓倒されたらしい。

二、どうして機械化兵團が進出したかの問題であるが、これは無論密林地帶を通したわけではないらしい。これは「ヂベート」要塞が陷落したため、「マース」河谷の主要道路、其の他西方の各谷地竝に鐵道線路に添ふた地區を、これ又平時調査の周密なる情報に基き、之に對處し得るやう十分なる自信を以て何等の苦痛も、差したる障碍も起さず通過したらしい。

これらの國境調査は獨逸としては多額の費用と、長時日を費し、綿密周到に平時から掌中に入れ、玉手箱にしまつて置いたらしい。

三、「ベルギー」戰場殊に「マース」河畔で擊退した佛第九軍團に、獨の快速部隊は其の直後に尾擊(逃げる敵のすぐ後につゐて行くこと)して、佛軍をして戰場離脫(敗軍がなるべく早く勝者軍と離れて自由に其の後の作戰を準備するため觸接を絶つ意味)

を許さず、どつと押寄せて來たこと。

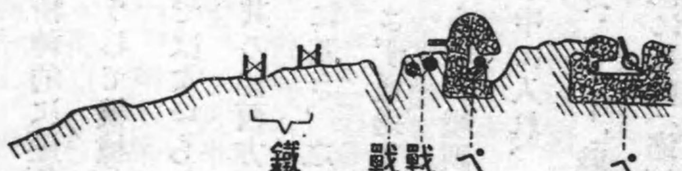
四、獨逸の空軍、機械化部隊の著しき發達せる威力が、其の攻擊力を臨時築城程度の陣地抵抗力を破摧して、遙かに凌駕してゐたこと。

こんなわけで大破孔があげられ、どつと北佛地方になだれこんだもので、さあ巴里危しと見せて急轉大旋回の方向變換！　一擧に英吉利海峽に突進した大作戰は敢行されたのであつた。

「ラカベル」―「ヒルソン」間の大激戰！（要圖參照）

「マヂノ」陣地突破戰で、最も近代的戰鬪の激烈に行はれたのは、「ラカベル」―「ヒルソン」間の突破戰であつたらう。例へ佛軍は跪く

「ラカベル」附近佛軍陣地縱推斷測圖



も敗れたとは云へ、古來傳統的の「フランス」魂は尙ほ未だ滅せずの意義を示して、獨軍を大に惱した戰況を述べて見やう。

佛軍陣地の設備はどうしてあつたか

ペトン製「トーチカ」を據點として左右に野戰築城を施し、障碍物としては有刺六番鐵線二條で、高さ一米二〇前後、對戰車壕、同地雷の敷設しある程度で、近代最新式の縱深陣地（主抵抗陣地の外第二、第三の陣地が縱深に重疊し其の奧行三粁に及ぶものもある）ではない。

五月十六、十七日の激戰

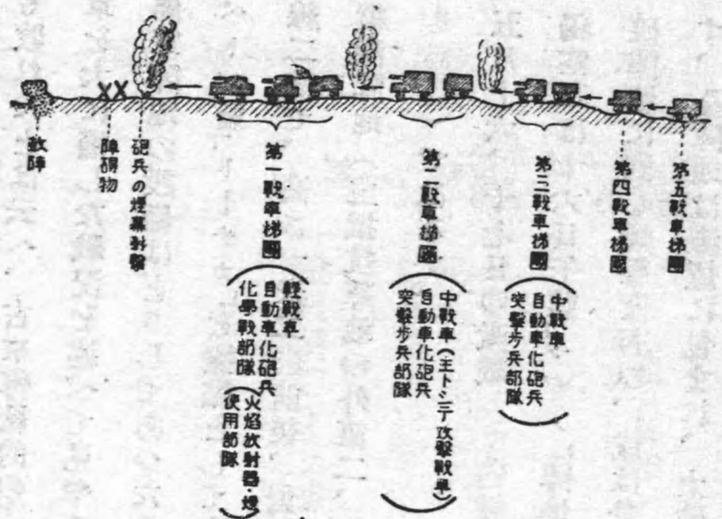
獨空軍は十六日午前「マヂノ」陣地上空に現はれ、縱橫に亂舞活躍し、其の豫定する突破陣地に對し爆擊を行ひ、或は急降下掃射をなし、重砲は之と連繫し巨彈を以て猛擊す、全陣地は濛煙に包まれ、土砂飛揚し、鐵條網は中空高く舞ひ上り、爆煙の間より望む敵陣地は刻々くづれ行く破壞狀況、間もなく野砲、重砲の發煙彈射擊により一面

に煙幕は展べひろがり、其の幕波で全く屏風を立てたやうに眼隱をした。

遙に轟々の音をたてて、獨の機械化兵團は戰車を先頭に突進を始めた。

序に獨逸機甲兵團の敵陣突破に向ふ前進方法について述べて見やう。

第一戰車梯團は味方の煙幕射擊に蔽はれて、敵陣地に直進し、豫め偵察してある障碍物の破壞された所とか、破壞されかゝつた所を選び、なるべく通り易い所から鐵條網を突破して敵の陣地に衝擊し、遮二無二突進して陣地の後端に出るか、又は陣地と陣地の間を繞回して其の側背に出で、敵兵に第一の打擊を與へ、隨伴してゐ



る自動車砲兵はこの戰車の突進を妨害する、敵の戰車砲なり、重機關銃なりを、片端から射擊して撲滅に努める。火焰放射隊は灼熱なる火焰を一齊に放射して敵陣を燃燒し、人員を火傷さす。

第二梯團は約千五百米を距てて續行し、自動車化砲兵と共に專ら敵が抵抗する主陣地帶の、あらゆる火器に戰車火力を集中しつゝ前進する。

この梯團の戰車は障碍物を乘り越へ、踏み倒して敵陣地に驀進し、我が砲擊なり爆擊なりにより敵の抵抗組織が攪亂せられあるに乘じて、迅速に主抵抗陣地を突破し、其の後方にある敵の砲兵陣地を襲擊し、更に第二陣地に突進する。

突擊乘車歩兵部隊は、此の戰車の突進に隨伴して、敵陣地にある守兵を片つ端から射殺し、又は刺殺する爲突擊を行ひ、遁げ殘りの敵を掃蕩しつゝ突破陣地の確保に任じ敵の逆襲に備へる。

第三梯團の任務は第一、第二梯團が敵陣を蹂躙した側背を攻擊し、同行する歩兵部隊

は主陣地帶の攻略と、敵を捕捉して殲滅する役割である。

第四梯團以下は突破した所を擴大したり、敵砲兵の觀測所、彈藥、糧秣の補給所を强襲して、到る所に混亂動搖を惹起せしめ、敵をして右往左往に陷らしめて沈着冷靜を失はしめ、て全陣地を全く陷落せしむる手段である。

梯團の長さは其の時により違ふが、通常八—十粁位の大縱隊となる。

「ラカッペル」附近に現はれた獨の戰車軍の突進！

見渡す限り濛々たる砂塵に埋もれて突進し來る獨の戰車群！　其の數幾百幾千！　前より右から、左から連續不斷に打ち寄せて近づき來る、空には飛行機！　隼のやうに急轉降下して爆擊、掃射、獨砲兵は巨彈の雨を降らし、眼前には煙幕張られ敵方を見ることが出來ぬ。

戰車は近く進み來りて其の重爆彈を「トーチカ」正面から浴びせかける。今や物凄き戰鬪は展開された。

佛軍各守備兵は決死の抵抗を試みた。一堡壘では機關銃兵が悉く斃れたので、將校自ら其の操作をなし、天晴れ雄々しき勇敢なる奮鬪振りが獨軍からも觀望された。殊に一老大尉の如きは叱咤激勵して守備兵を鼓舞し、ある時獨軍戰車の機關銃掃射に兩眼を撃ち貫かれて斃れたのも目擊された。雲霞の如く突進する獨軍は白兵を揮ひ手榴彈を擲げて肉迫した。さすがに死力を盡くして防戰に努めた佛軍も、此の精鋭なる空、陸よりする機械化威力に敵し兼ねた。獨「ボヘミヤ」軍（東部獨逸ボヘミヤ州にて編成せし軍）は迅速果敢なる突進により、「ラカベル」—「ヒルソン」開の「マヂノ」線を突破楔入した！　この偉大なる戰果は直ちに右へ左へと擴大され、至る所に接戰搭鬪はぜ演られたが、結局勇敢なりし佛軍も獨軍の猛虎に追はるる群羊の如く、止まつて逆擊に轉ずる勢も消へ失せ嘗ては世界に誇りし金城鐵壁も無殘に突破され、其の抵抗は紛碎された！　斯くして一路巴里を目指す直路も、英佛海峽の沿岸に殺倒する進路も、自由に獨軍の掌中ににぎられ、決定的な突進を開始することが出來るやうになつた。

一五、追擊！ 進擊！「ソンム」河へ！ 英佛海峽へ！

獨の機械化兵團の主力たる次の兩裝甲兵團は、潮の如く北佛方面へなだれ込んだ。

「クライスト」大將の第二十二裝甲兵團

「グーデリアン」大將の第十九裝甲團

尙ほ「ホット」裝甲兵團、「ホエペエル」裝甲兵團は、白耳義戰場で佛軍第七軍團と其の戰車兵團とを壓倒的に海へ海へと攻擊してゐる。

佛軍最高司令部の狼狽！

獨軍の突破した正面は、佛軍統帥としては餘りにも意外で、其の豫想せし戰局の推移を裏切つた。「セダン」―「モーブジュー」間は防備編成上最重要の地區として、其の設備は相當堅固に施されてゐた。佛第九軍團の潰退、引きつゞき「アルデンヌ」の密林地加へてあの山岳地を踏破征服して「セダン」の眞正面に現はれやうとは、誰しも豫期しなかつた所で、殊に機械兵團が押寄せるとは夢にも思はなかつた。判斷の齟齬は結局賴るべからざるものを賴りとした不覺であつた。

獨軍「マヂノ」陣地を突破せり！ の飛報は如何に佛軍統帥を驚かしたことであらう。この重大なる戰局に對處するため、取りあへず獨軍が巴里を目指して突進するものと推定し、曩きに「ソンム」河畔「サンカンタン」―「ラオン」附近の北佛地區に集結中である巴里附近にあつた軍を、極力「オワーズ」河畔に推進せしめ、更に「ヴェルダン」附近にある砲兵集團、及び六歩兵師團を急遽北上せしめて、危急存亡のこの時機を彌縫せんとした。この兵力轉用は餘りにも戰況の急變であつたのと、北方より獨軍來るで逃げ出した避難民の洪水で、南へ〳〵となだれこむ混雜のため、交通が杜絕され、如何に整理しても軍の行動意の如くならず、戰局上重大な不利であつた。

獨逸の宣傳は飽くまで一擧巴里を攻略するにあつた。

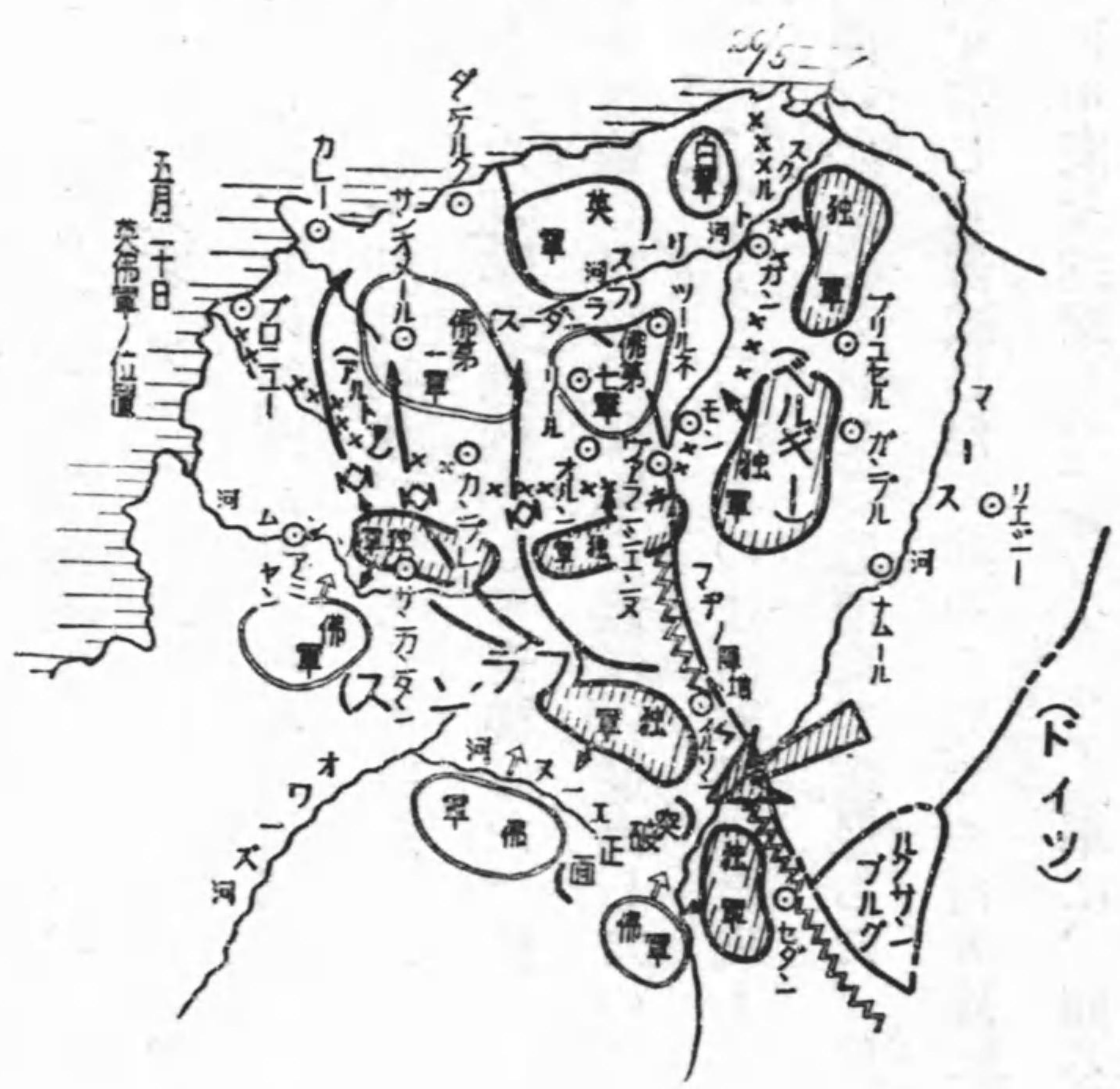
「ラヂオ」に、新聞に、第五列部隊に、戰場での告諭にあらゆる宣傳は一擧巴里を衝き

佛蘭西全土を席捲するにあつた。獨逸將兵の大部分もこれを信じ、意氣壯烈の眉宇に明日は「ソンム」河に、明後日は「エーヌ」河にと必勝の信念を抱いてゐた。況んや獨逸國民も二十年の宿敵、怨かさなる敵首都巴里の攻略を鶴首して待つた。佛國上下がさう信じたのも決して無理はない。恐らく世界の軍事界でも當然それを確認したであらう。唯一人獨最高統帥「ヒ」の、胸中深く祕めてゐた大作戰は、全然方角違ひの「フランダース」の殲滅戰こそ、第一階段の大方針であつたのである。

急角度の方向轉換！　英佛海峽へ！

「マヂノ」線を突破した獨軍は、至るところで佛軍の小なる反擊をうけた。然し統制ある大規模の逆襲はなく、一遽に「ルンドステツト」集團軍の先頭「クライス」快速機甲兵團は「エーヌ」河に向ひ突進し、右縱隊たる「クルーゲ」軍は「サンカンタン」―「アツペビール」の「ソンム」河に、左縱隊たる「リスト」軍は「ヴエルダン」―「ブチエー」附近迄進出し、將に巴里を衝かんとする氣勢を示した、其の時獨軍の追擊！　進擊はぴたりと止まつた。陣營急に靜かである。これぞ「クルーゲ」―「リスト」兩軍の主力を現在到達線

五月二十日（マヂノ線突破後）の彼我兩軍關係戰況要圖



に殘して佛軍の北上に備へ、再び二十年前の如き佛軍の反擊による一大齟齬を豫防した、「クライス」快速兵團は電光石火で に身をかわして五月二十日の早曉には北方に方向を轉じて、自動車化步兵師團を續行せしめて、最右翼方面より突破せし「ブッシユ」軍、「グンデリアン」快速機甲兵團と共に「カレー」―「ダンケルク」を目標に「アルトア」地方に進入し、完全に白耳義にある英、佛軍と、佛國に

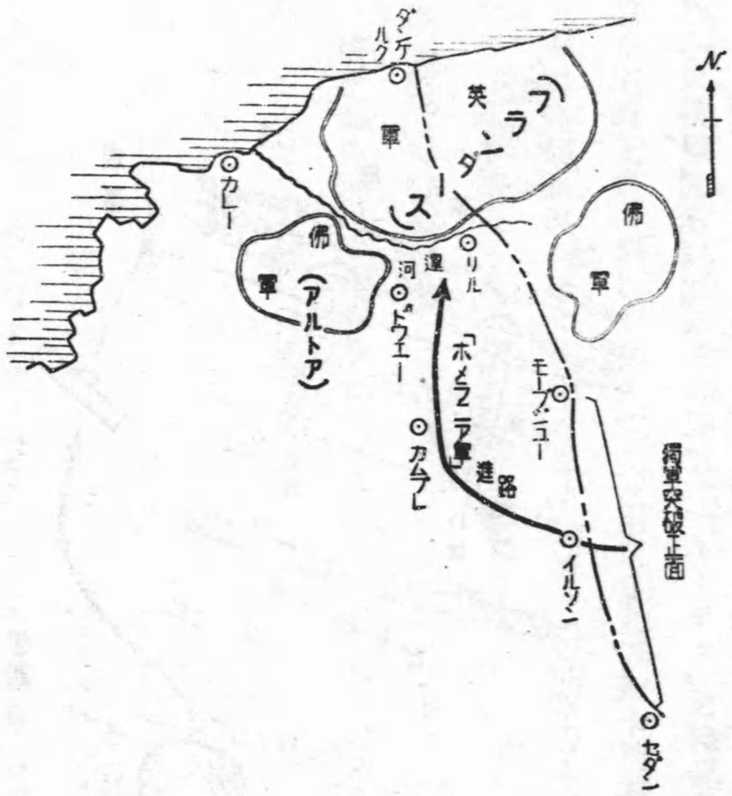
ある佛軍とを中斷分離して各個に撃滅すべく、大包圍圈達成に一意奮進した。

「クライスト」―「グデリアン」兩機甲兵團の英佛海峽目がけての進撃は、餘りにも敏速果敢であつた。元來「アルトア」地方は河川が多く、戰車の前進には相當大なる障碍をなすのであるが、この繞圍部隊は巧みに河川と平行せる交通路を利用し、何等の故障なく時速四、五十粁の快速で野も山も突進した。「アベヴィーユ」市の練兵場で佛軍が教練中であつた部隊を忽然として奇襲した。驚きあわてゝ四散するを掃射して、殆んど全部を薙ぎ倒した程、佛軍の意表に進出したのであつた。

繞回運動中の「ポメラニア」軍の運河地帶の激戰！

機械化兵團の北進は非常なる急速度で進展した。然し之れに續行する部隊は各所で相當の激戰をなし且苦戰した。其のうちでも白耳義にある佛軍と、「アルトア」地方にある佛軍との中間を進撃した「ポメラニア」軍は、頗る前進困難なる運河地帶で、敵の包圍攻撃をうけ苦戰した。

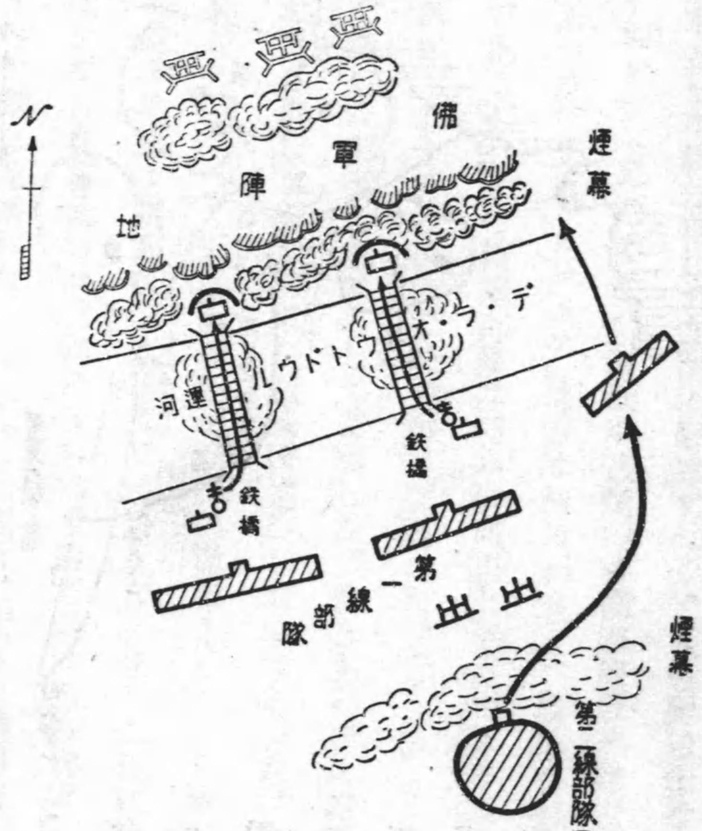
「ポメラニア」進軍撃要圖



この「ポメラニア」軍は「イルソン」（突破正面の概ね中央）附近から右に轉進して、「カンブレ」の北部を通過し、「ドウエー」と「リル」の間を突破して、「フランダース」と「アルトワ」地方に雲集する英、佛軍の南側に進出した。

五月二十五日「ポ」軍は、「デ・ラ・オウトドウル」運河に到達した。白耳義の戰場や、「マヂノ」陣地突破に赫々たる武勳を建て

「ポ」軍運河戰鬪



全軍中の名聲を獲てゐるだけに、將兵一同の鼻息は頗る荒く、士氣又頗る旺盛であつた。この無敵「ポ」軍も運河の渡河を決行するには暫く躊躇した。それは敵岸に佛蘭西軍が巧みに構築せられてゐる陣地は、「トーチカ」を據點とする頑强な塹壕で固め、銃口は悉く運河正面に對し、其の砲兵は少くも三、四十門我に砲口を向けてゐる。今「ポ」軍が一擧に運河を渡河せんとする軍は只第一線部隊のみで、第二線部隊は遙か後方で敵砲兵の彈幕射擊をうけ、第一線の部隊とは連絡がつかぬ。が、戰況は急であり、「ポ」軍が迅速敏活に行動したとすれば、こゝに架設しある二條の鐵橋を占領することが出來る。偵察した所では未だ異狀なく、破壞もされず、爆破の裝置もしてないことが判かつた。不幸にして渡河材料は極めて少い。一刻も早くこの鐵橋占據が眼前の急務となつた。決死の工兵と歩兵は選拔されて、勇敢なる中尉に率ゐられ敵から擊ち出す銃丸を潛り匍匐して急進した。此の時だ、今迄沈默して第一線部隊を射擊せざりし敵砲兵は、俄然として砲擊を始め、この鐵橋附近に砲彈を集中した。さすが堅固な鐵橋も半ば破壞された。決死隊は橋に逞りついて前面の敵と射擊を交へて奮戰したが、容易

に敵側に橋を渡つて突進が出來ぬ。砲彈は愈々猛烈に集注し、めり〳〵と鐵橋は壞れかゝつた。佛軍は前大戰に勇名をあげただけに强剛なる戰鬪威力を發揮した。

戰場は夜の漆黑の闇に包まれた。此の瞬間に決死隊長以下の兵は破壞された鐵橋を、猿の如く飛び越へて敵岸に突進した。盛んに機關銃の叫びはその附近で續いたが、遂に完全に鐵橋を占據した。直ちに增援部隊は送られ終夜佛軍の逆襲に堪へて死守した。

翌拂曉と共に佛軍の砲兵は、運河の兩岸地域に砲彈の雨を降らし、轟々たる喧騷、銃聲の響きは物凄きありさまであつた。昨夜來此の第一線部隊を救援し、且運河の上流たる右の地區より、渡河攻擊すべき準備を命ぜられたる第二線部隊は夜暗を利用し、凡ての準備を整へ曉明と共に渡河を强行した。これと連繫して第一線部隊も萬死を冒して、眞に敵眼前で渡河を決行し多大の犧牲は出來たが、兎も角さすが頑强なる佛軍陣地を奪取した。

最初は敵陣地の堅固なると、巧みに僞裝を裝した野砲陣地よりの射擊に、少からざる死傷と前進を阻止されその上運河渡河の困難なりしため夥しい犧牲を出した。幸に獨軍砲兵の巧みなる煙幕を展べて敵眼を蔽ふたのと空軍の協力で突破することが出來た。

一六、「フランダース」の英、佛軍は完全に包圍せられたり！

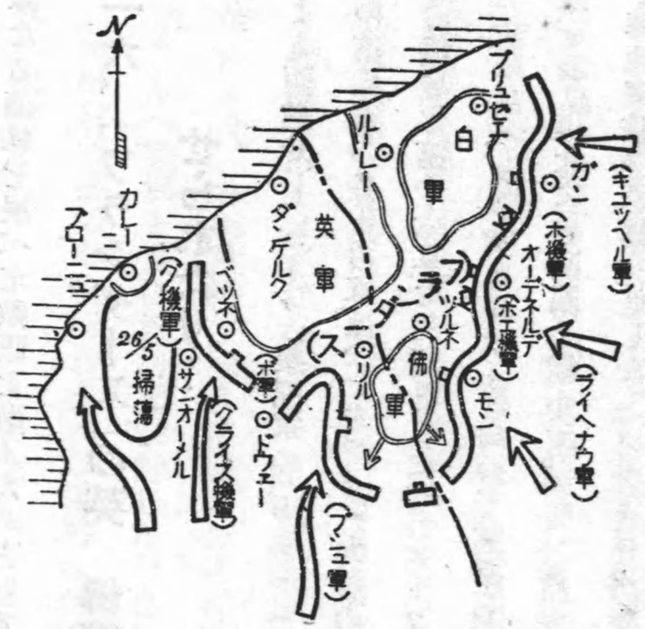
和蘭方面より西進せし「ボーク」集團軍の「キュッヘル」大將の第十八軍團、「ライヘナウ」大將の第六軍の各主力軍は、「ホッツ」大將の率ゆる機械化第十五軍、「ホッブネル」大將の機械化第十六軍を先頭として「アントワープ」を屠り、「ブリュセル」を降伏せしめ、「ガン」—「オーデネルデ」に向つて進擊し英、白軍を壓迫し、五月二十五日夕刻迄には「モン」以北に包圍圈を縮小す。

「マヂノ」陣地突破後急轉北進した「クライスト」—「グデリアン」兩機械化兵團は、一意「ダンケルク」—「カレー」兩海港の英軍揚陸根據地に驀進した。「ブッシュ」大將の第

十六軍も佛、白國境線に沿ふて北進し、佛第一軍團、及び第七軍團の死物狂ひの突破の企圖を破摧し、甚大の損害を與へて壓縮した。五月二十五日には圖のやうに完全に包圍圈は達成された。同時に「ブロニュ」及び「カレー」港は占領せられ、其の附近一帶は翌二十六日に掃蕩された。五月二十八日英、佛軍は完全に隔絶せられ、白軍は降伏す。

「フランダース」の平野は連日連夜至る所に戰鬪は展開された。戰場は入り亂れて互に交錯紛糾し、敵味方の見さかへさへつきかぬる混戰である。あの總

於五月二十五日兩軍戰況圖
（獨軍包圍圈完成）



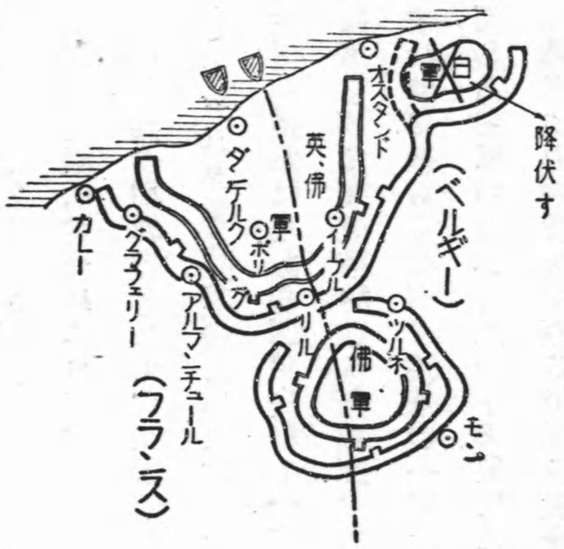
面積約三萬方粁の地域に獨、英、白、佛軍合して概略二百萬人の戰鬪部隊が各々鎬を削り、死力を盡くして紛戰亂鬪したことは、蓋し想像するだけでも壯烈悲慘であつたらうと思へる。

この日英軍はとう〳〵「オスタンド」から「リル」―「アルマンチュール」を經て「グラフエリー」を連ぬる線内に押込められてしまつた。

包圍されたる英、佛、白軍は如何なる作戰行動をなしたるか

佛第一、第七軍團、機械化兵團は獨軍のため二重、三重に包圍されて孤軍奮鬪した。増援軍は來ない、何んとかして血路を開き獨軍の一方を突破し、本國軍と連絡せ

五月二十八日戰況



んとしたが、獨軍の鐵壁陣は微動だもしない。

日增に犧牲の山を積む許り、彈丸は次第に缺乏し、戰車の原油は補給がつかぬ。ひしひしと獨軍の包圍は押つめられて、五月二十六、七日頃は全く重圍に陷り、英軍との連絡も絶へ將兵の精魂盡き果て、又如何ともする能はず、佛本國内にある主力軍は例へ獨の「ルンデスラット」軍のために進路を阻ばまれてゐるとは云へ、眞に熱烈燃ゆるが如き救援精神だにもあらば、決して悲觀すべき情況でもなかつた。又重圍中の佛軍も又之に劣らざる突破精神さへあらば、内外相呼應し死力を盡くし、一方の血路を開かんとすれば、恐らく必ずや獨軍の一環をぶち切つて脱出し得たに違ひないと考へらるゝ。何しろ獨軍の空から急降下爆擊にたゝきつけられ、見渡す限りの四周は悉くこれ敵！　佛軍主力の救援は頗る消極且散發的で、一向もの〳〵しい反撥力を見せることなく、志氣次第に憔悴して其の大半は戰意を失ひ、遂に凋落するに至つた。

一七、白國軍の降伏！

五月十日獨軍は白耳義に進入した。翌十一日白國皇帝「レオポルド」三世は布告を發して白國の決意を表明した。

「白耳義は獨軍の侵略に對し、一九一四年第一次歐洲大戰に於けると同樣、飽くまでも抗戰せんとするものである。現在の我が國は一九一四年に比して遙かに優れた軍備を有してゐる。加ふるに英、佛は「ベルギー」を武力援助しその先發派遣軍は既に「ベルギー」救援途上に在り」

斷乎抗戰の決意を披瀝した。然るに開戰以來「リエジュー」―「ナムール」―「ディナン」「アントワープ」の各要塞相ついで陷り、「マース」河の各陣地は突破せられ、首都「ブリュセル」は降伏した。戰局逐日不利となり、獨軍の包圍圈内にあつた英、佛聯合軍は情勢愈々絶望的となり、唯全力を以て英軍の遁走準備にある乘船中の英派遣軍と、

英軍に依る白國内各種築造物の破壞とを防禦するのみとなつた。

白耳義皇帝は五十萬の國軍殲滅を見るよりは、降伏するに如かずと觀念された。獨總統大本營は五月二十八日午前十一時半全獨逸國民が大歡喜、最大の誇りに滿された特報を左の如く發表した。

「獨逸軍の殲滅的威力を痛感した白耳義國王「レオポルド」三世は、獨軍武器の壓倒的優勢の前に無益の抵抗を繼續することを中止し、休戰を懇請することに決定した。かくて「レオポルド」三世は無條件降伏に關する獨逸の要求に從つたのである。白軍は二十八日を以て武器を捨て、その存在を停止した。我々はこの時、他に比類を見ざる戰鬪精神を以て世界最强の防禦施設に屬する諸要塞に突入したる我が勇敢なる軍隊に、深き感謝と誇りを招來したる軍隊を讃歎する」

獨大本營は同日午後一時三十分重ねて左の發表を行ふた

「新なる流血の慘を防ぎ、その國土を無益なる破壞より救はんがため、「ベルギー」國王「レオポルド」三世は閣僚大多數の意思に反し、その武器を捨てることに決意された。今日慘禍を齎らした當の責任者たる白耳義政府は、依然として其の使用主英、佛兩國の命を奉ぜんとしてゐるかの如くである。「ヒ」總統は「ベルギー」國王竝に同國の軍隊に對し、勇敢なる戰士が當然受くべき待遇を與へるやう命令を發した。白耳義國王は御自身の關する限り、何等の希望も表明されなかつたが。獨逸は國王永住の場所が決定するまで、國王に「ベルギー」の某城を提供することになつた。今回降伏した「ベルギー」軍の總兵力は約五十萬である。軍は更に兵力を增强して主犯者の殲滅に邁進するであらう」

英軍の左手とも賴んだ白軍は遂に降伏した。この方面にあつた獨軍「キュッヘル」軍は一氣に三十粁前進して、英軍の左側、佛軍の背側面に直接逼迫した。

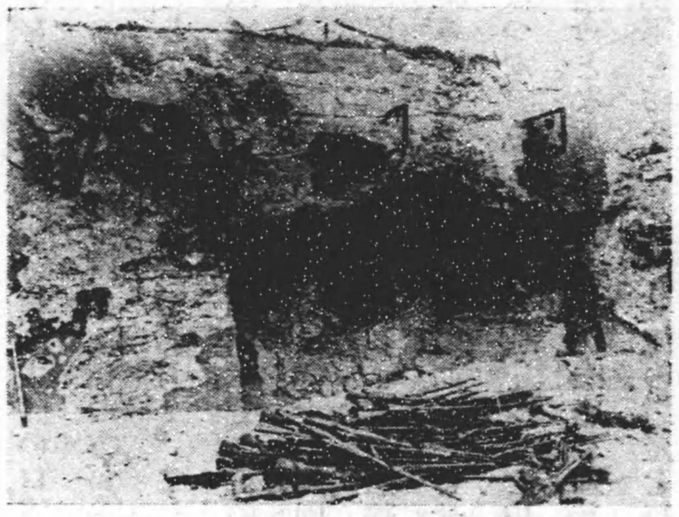
同日在「パリ」の「ピエルロ」白耳義首相は聲明を發した。「我々は白國王の降伏命令を否認する。「ベルギー」國民は飽くまで抗戰を續行するものである。國王の決定は政府

の勸告に抗して行はれたものであり、それは「ベルギー」國民を拘束するものではない。「レオポルド」三世は國王の資格なきものと認め、從つて今後「ベルギー」官吏は國王の忠誠の誓約から解決される。我々は「バリ」に於て會議を開き、全會一致を以て抗戰繼續を決議した「ベルギー」政府は、英、佛内に於て「ベルギー」軍を再組織し、總ての「ベルギー」避難民を「フランス」政府の提示によつて、「フランス」の國防に從事せしるであらう」と放送演說を行ふた。

痛わしき白國皇室の別離！

白國皇帝は獨の軍門に面縛して降り、某城に敗殘の月を眺め、皇子「ジョセフィーヌ」王女「ボードウアン」、五皇子「アルベール」の三方は、佛國「ツール」の西南に「ベルギー」亡命政府の所在地として選定せられた、「ボアティエ」に移されて保護されてゐた。今や白國政府も、この皇子だちも英京附近に潛在し、事志と違ひわびしき生活をしてゐることであらう。

英派遣軍の最後！



爆破されたる「マヂノ」堡壘

英國が前大戰に「フレンチ」元帥の指揮する四師團と、騎兵一師團を「カレー」に上陸せしめ、佛軍と協力して專ら「フランダース」地方に健鬪したのは、一九一二年の英、佛軍事協約に基いたものであつた。

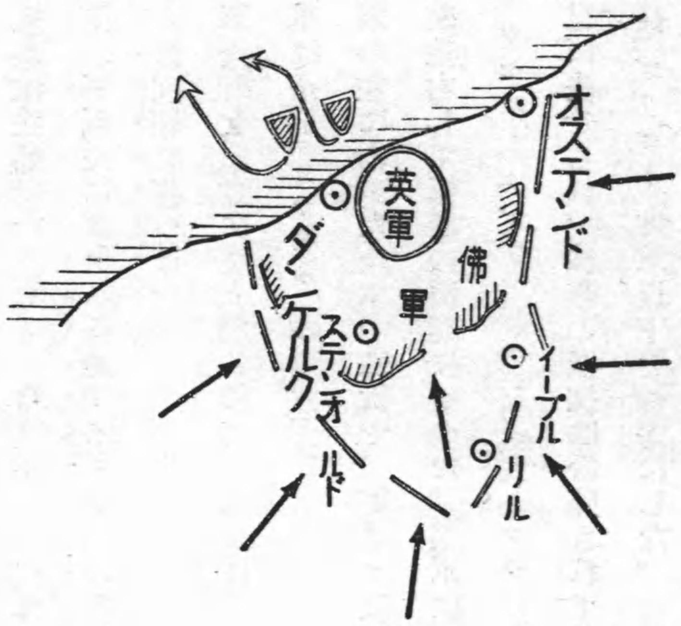
今次の戰爭も英對波の軍事同盟の關係上、獨逸に一九三九年九月三日宣戰布告をしたのと、佛との軍事協約によつて出兵したのである。

他面には「ベルギー」—「オランダ」の英佛海峽に近き地區を獨逸に占據されたら、絕對的に國防上の危險が伴ふので、英としては自衛上是非共自排除せらねばならぬ關係であつた。

老獪なる英が大陸へ出兵するは戰況有利なれば戰勝の曉、絶大の獲物を狙ひ、其の慾望を達成せんとする權利主張の口實を留保するのが常套手段である。一度び戰況不利とならば、英本土直接防備の方が先決問題であるから、さつさと引揚ぐるのは打算國としては當然の處置であらう。まして佛なり白なりを全國力を傾けて救ふなんて至誠忠實の信念はない。佛國こそ一種の道連れにされて、徹底的に熱湯を呑まされたわけだ、今度派遣した英軍は約十三師團と聲明してゐる。

一度び獨軍が急轉直下して大包圍線を完成すると、英軍としては狼狽其の極に達した。至るところ獨軍は怒濤の如く押寄せ、佛第七軍團とは連繫が絶へ、戰況日增に不利となつた。そこで「ダンケルク」港を中心に全力を纏めて三十六計に決意し、引揚準備に懸命となり、死物狂ひに乘船を急ぎ、佛第一軍團と白軍には徹底的に各々其の當面の獨軍を防止せしめ、英軍の遁走を掩護せしむる義務を要求した。

此の混亂せる戰況のうちに自己本位のみを主張する英軍にも、獨軍の猛攻は一層强烈となり、大會戰は最高潮に達した。空陸呼應の立體的迫力は日一日と甚大となり、熾烈なる敵の抵抗を破摧し、包圍せし敵を不斷に狹小なる地區に壓迫した。英の將兵は全く戰意を喪失し、疲勞困憊の極に達した。殊に「ティール」附近の英砲兵群が肉迫壞滅せられたので、第一線の部隊は先を爭ふて「ダンケルク」に退却し、其の混雜は一層ひどくなつた。英、第一軍團は「ダンケルク」—「オステンド」間五十キロの海岸線で、「リル」を繫ぐ三角形の地域、面積の廣さ東京府位の所に追ひ詰められた。包圍圈内の英、佛軍は「イープル」北方地區に遁走、掩護



一七、白耳義軍の降伏

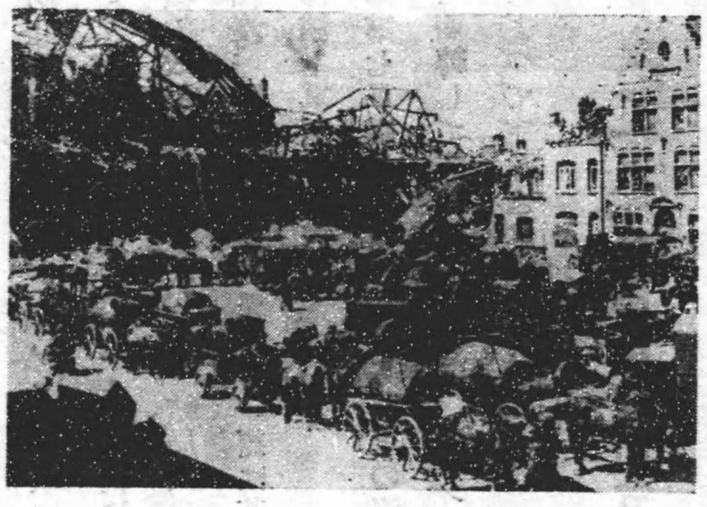
陣地を設け獨軍の進擊を喰ひ止めつゝ、英軍主力を「ダンケルク」方面に集結しせしめ、軍艦及輸送船で命から〳〵自己保全に狂奔した。

佛第一軍團長には例へ全滅するも英軍の乘船終るまでには絶對退却又は潰滅すべからずと難問題を押つけた。

英軍退却を忠實に護りたる佛第一軍團長「ブリユー」將軍、竝に麾下全幕僚、及び敗殘の軍は全部「カツセル」の東方「ステーンヴォルド」で捕虜になつた。

英軍の左にあつた白軍の降伏で、英軍は戰況の大急變となり、そのなす所を知らず、往左往右して極度に困窮に陷つた。獨軍は直ちに翌二十九日「オステンド」を屠り、又「カツセル」—「ボリングン」の線で「フランドル」地方にある佛第一軍團の主力の運命は已に決せられ、彼等の抵抗は粉碎されて、悉く捕捉殲滅の悲運に陷らしめ、遂に軍團長「ブリヨー」將軍以下を捕虜にした。

五月二十九日には、英軍は獨軍の集中攻擊を蒙り、死を決して頑强に「ダンケルク」を死守したが、命旦夕に迫り、絶望的の抵抗をなしつゝ、同港から海、空軍の掩護の下に敗慘軍の脱出に勉め、英軍だけは辛じて遁げ得たが、獨軍の空、陸軍の肉迫攻擊は眞に屍山血河の慘を呈した。英、佛軍の尙踏み止まつてゐる殘軍は殲滅か捕虜となつて、五月三十一日には「フランダース」—「アルトア」戰場は全く英、佛軍の大敗となり其の軍需資材、其の裝備は戰場一面に山積された。六月四日獨軍は廢墟の如き「ダンケルク」に進入し、市街戰の後「ルイ」堡壘を奪取して同港を占領した！四萬の捕虜と無數の鹵獲品を得た。逃避する英軍を大空爆したのであつた。



完膚なきまで爆擊に廢墟と化した「ダンケルク」市に獨軍入城

獨空軍は英輸送船團を海上に追擊して爆擊し、遁げ去る英船、追ひ擊つ空軍！　之を防止する英海軍！　「ドヴァ」海峽は眞に壯烈なる海上立體戰であつた。當時英軍は泳いだり、小舟に乘つて「レード」河に碇泊せる英船に辿りつかんとするを、獨空軍は破壞的效果を以て襲擊した。結局六〇隻以上の艦船を襲ひ內戰艦三隻、輸送船一六隻は沈沒、軍艦一〇隻商船二十一隻は甚大の損害をうけ、又は炎上した。

佛第七軍團も降伏す

佛第七軍團と機械化兵團も英軍の沒落、友軍の殲滅、白軍の降伏に全く刀折れ矢つきて面縛して降伏し、こゝに「フランダース」の一大殲滅戰は完全に獨軍の赫々たる戰勝によつて完遂された。!!

一八、獨軍最高司令部の「コンミユニケ」發表！

「フランダース」と「アルトア」の大戰鬪は終止した。この戰鬪は有史以來の最大の破壞戰として戰略史上に記錄さるるであらう。戰鬪開始からこの報告に至るまでの期間に示された獨逸兵の英雄的行動と、獨逸式指導力の輝しき一頁は、一致團結せる國民の犧牲を惜まぬ熱意と、決意によつてのみ生み出されたものである。

同時にこの大決戰の戰果を發表した。

一、聯合軍の捕虜合計百二十萬人以上、他に多數の戰死者、負傷者、溺死者を出した。

二、飛行機の擊墜數、千八百四十一機（內空中戰で千百四十二、高射砲で六百九十九機）、その他地上で破壞又は燃燒せしもの千六百乃至千七百機、合計三千六百機以上。

三、海軍及空軍の擊沈したるもの、巡洋艦五隻、驅逐艦七隻、潛水艦三隻、其の他九隻、商船、運送船六十六隻、損傷を受けた巡洋艦十隻、驅逐艦二十四隻、水雷艇三隻、其の他二十二隻、運送船、商船百十七隻、

四、獨逸軍の死傷、戰死一萬二百五十二人、行方不明八千四百三人、負傷者四萬二千五百二十三人、飛行機の損害四百三十二機、艦船の損害なし。

かくて第一期殲滅戰たる「フランダース」の大決戰は、五月十日—六月四日に亙る二十五日間の連續せる戰鬪によつて大終止符をつげた。

思へば獨軍の放膽不羈なる、大包圍作戰は統帥の妙と果敢斷行の勇と、周到綿密なる準備とにより、一大偉業を完遂したのである。

萬難を克服する軍隊殊に精神的躍如たる忠誠の結晶は、鐵壁を貫き、鬼神を避けしめ、堅忍不屈の大精神を發揮してこそ卓絕の統帥と相俟つて、戰爭の目的を達成したものといへよう。

この最大なる戰果の一半を荷ふ比類なき獨空軍の協力こそ、又特筆すべき功績であつて、又獨逸が唯一無二の國防威力の信念としてゐるのは、この絕對優勢なる空軍の力であることを、誰しも首肯させられる。

佛蘭西の壞戰滅（第二次作戰）

一九、獨軍司令部六月二十五日對佛戰果の發表

（自六月五日至同月二十五日二十間、「フランダース」殲滅戰後）

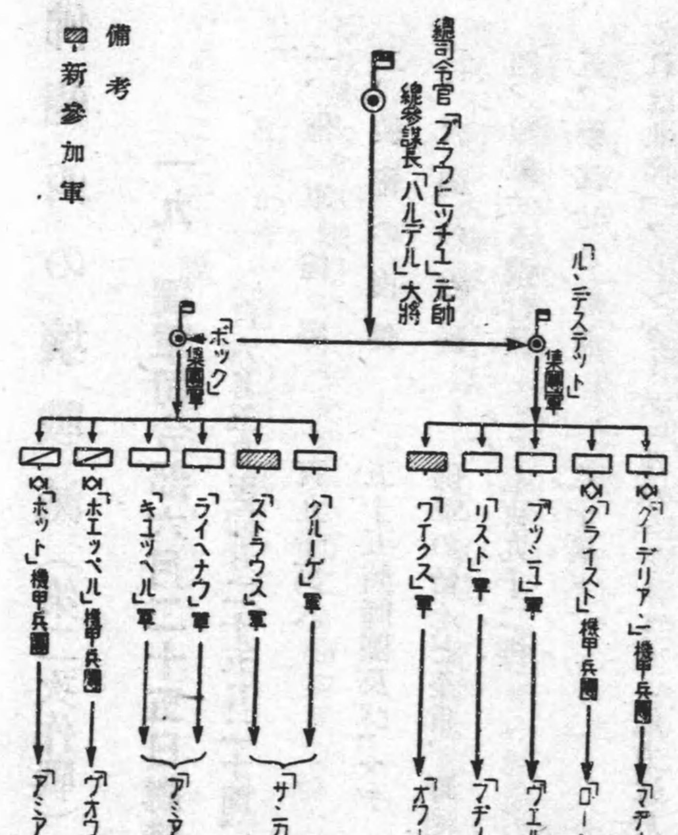
一、佛軍捕虜　百九十萬人
二、裝備の鹵獲　五十五箇師團及び「マヂノ」要塞の全裝備
三、火砲の鹵獲　佛軍の殆んど全重、野砲
四、擊滅せる飛行機　七百九十二機
五、擊沈せる船舶　八十萬トン

これは北佛「フランダース」及び「アルトワ」地方に於ける大殲滅戰の終了するや、直ちに之れ迄戰鬪に直接參加しなかつた、獨逸の「スタラウス」軍とか「ワイクス」軍の多數師團も新に參加して、空、陸、呼應佛國に對する壞滅戰的攻擊を開始した戰果である。

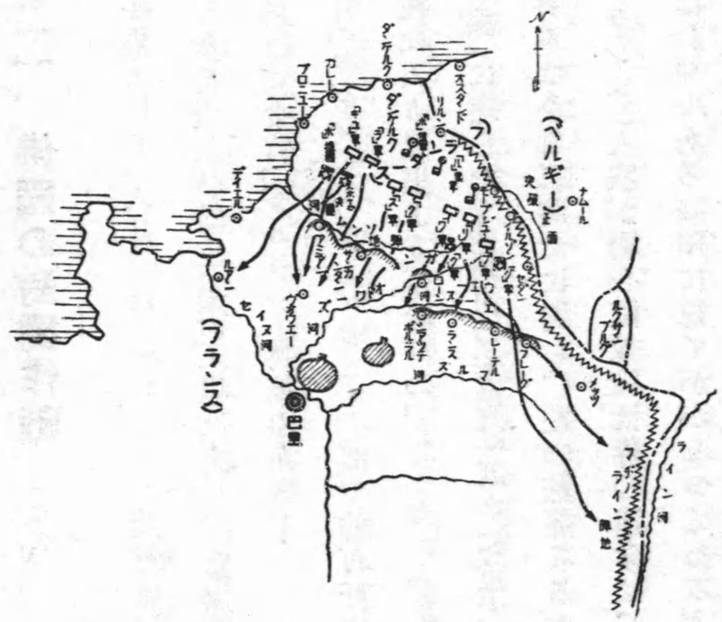
一九、獨軍司令部六月二十五日對佛戰果の發表　二一九

二〇、獨逸軍の新軍容と各軍の任務

作戦に對する獨軍の新陣容



各軍の作戰任務、



對佛壞滅戰の作戰方針は、「シャンバーニュ」地方「ウエーガン」陣地を突破す、同時に「マヂノ・ライン」要塞を背面より包圍し其の守備軍を捕捉し、一擧に巴里を攻略するにあつた。

二一、佛國の對獨作戰

新作戰の序幕として、六月三日（ダンケルク港附近に英軍を猛攻中）獨逸空軍の精鋭は、巴里周邊の飛行場及び航空軍需工場に對し、猛爆擊を徹底的に敢行した。

悲壯なる佛總司令官「ガムラン」將軍の布告！

五月十七日「セダン」―「モーブジュー」間、約百粁の「マヂノ」陣地を苦もなく突破した獨軍は、夜に入り巴里より百餘粁の「レテル」―「ラオン」―「サンカンタン」（概して「ソンム」河の線）に達した。佛蘭西の形勢は遽かに重大化するに至つた。佛軍總司令官「ガムラン」將軍は全佛軍將士に對し、左の悲痛なる布告を發した。

「祖國「フランス」と我が聯合國竝に世界の運命は、現在進行しつゝある。我々の側に於て戰はれつゝある戰鬪に總てがかゝつてゐる。英空軍も我々と同樣全力を擧げて奮鬪してゐる。我が部隊にして進擊し得ないならば、突破し來る敵軍に對し、陣地を棄てるよりむしろその場に戰死せよ。「フランス」史上重大危機に當つて、常にそうであつた如く、今日のモットーは我々は勝たねばならぬ、然らずんば死あるのみ」

この悲哀を帶びる軍司令官の訓示は、全軍に如何なる感じを與へたか、國民は何んと判斷したか、大厦の將に倒れんとする一木のよく支ふべきにあらずの感がある。

佛軍總司令官を斷然交迭し士氣の轉換を圖つた

危機に立つた「フランス」は翌十八日內閣の改造を發表し、前大戰の勇將で、「フランス」の守護神と呼ばれたる、當時「スペイン」大使たりし「ペタン」元帥を副總理に据へた、又「ルブラン」大統領は十九日夜突如佛軍總司令官を交迭し「ガムラン」元帥を罷めて、近東軍司令官たりし「ウエイガン」大將を佛軍總監兼佛軍總司令官に任命した。新に大任を帶びた新司令官「マキシム・ウエイガン」大將は當時七十二歲、前大戰には「フォシュ」元帥の參謀長として、かの「マルヌ」の會戰に獅子奮迅の勢で、巴里に殺到した獨軍を斷乎「マルヌ」河畔に迎へ擊たんと、雪崩れをうつて退却し來る佛軍を踏み止ま

らしめると共に、巴里軍を以て獨軍の側背目がけて攻勢に轉じ、さすがの獨軍をして巴里を眼前に眺めながら、空しく退却せぜるを得ざるの運命に陷らしめたる、神謀奇策の具申者であり、偉大の戰功者である。

佛軍團長以下の指揮權を剝奪す

五月二十日獨軍は「ランス」を占領し、獨軍機械化部隊はさらに猛進、翌二十一日には「アラス」―「アミアン」―「アブヴィル」の線を占領して遂に英、佛海峽に達した。

「レイノ」佛首相は二十一日上院に於ける戰況報告で、「ベルギー」作戰失敗の責任者は嚴罰に處すべきであると言明したが、「フランス」政府は當面の責任者たる軍團長、師團長、その他の部隊長等十五名に達する將官の指揮權を剝奪する旨を發表して、軍の肅清を計つたが、時已に遲く、却つて反感を買ふのみで效果はなかつた。

急遽「ウェーガン」陣地の構築

佛國の危急存亡の際、新に佛軍總司令官に任命されたる「マキシム・ウェーガン」大將は、獨軍が今や「フランダース」―「アルトア」地方で英、佛軍を海中に叩き落さんと猛擊力攻の最中、在佛本國軍を以て之が救援をなさんとするも、「エーヌ」河畔に頑張る獨の「リスト」―「ブッシュ」兩軍を突破せねばならず、よし之を完遂するとするも右側背にある獨の「レーブ」集團軍は、嚴然として佛軍の背後に進出せんと「ウィッレーベン」大將の第一軍は虎視耽々として、其の隙を窺ふてゐるので、斷乎として攻勢にも出られぬ情況であつて萬策つき案出したるものが、「ウェーガン」陣地である。この陣地は「オワーズ」河を中央とし、左は「ソンム」河、右は「エーヌ」河を前地の障碍として陣容を整へ、猛進し來る獨の空、陸軍をこの線にて拒止し、あわよくば第一次大戰の「マルヌ」河畔の奇捷にならつて、一大決戰する積りで夫々麾下の諸軍團を配置し、首都巴里の第一線防衛線としたものである。

だから陣地の設備としても時間はなし材料は急に集まらぬ、戰車に對する障碍物の戰車壕なり、地雷なりを埋設するひまもない、抵抗陣地もほんの野戰陣地で若干の「ト

ーチカ」を配置し、其の左右に簡單な射擊陣地がある位の程度で、誠に心細きわみであつた。

「ソンム」なり「エーヌ」なりの河を賴りとしたが、「レーテル」附近の河幅は三十米内外で「クリーク」位のものであるから、何の躊躇もなく一氣呵勢に乘り切られたのも無理はない。

この陣地は「ウエーガン」將軍が企劃したので、誰云ふとなく自然に「ウエーガン」陣地と謂ふやうになつた。

二二、獨軍總進擊を開始す（六月五日）

「ソンム」の强行渡河

佛軍「ウエーガン」陣地の左翼方面である、「ソンム」河左岸地區の攻擊は「ボック」集團軍の「ホット」、「ホエッペル」兩機械化兵團の突進によりて開始された。續く「ライヘナ」軍、「キュッヘル」軍は「アブウイル」―「アミアン」間の敵陣地に向ひ猛攻を加へ、「ストラウス」軍と「クルーゲ」軍は「サンカンタン」―「アルベール」地區の敵を攻擊し、佛軍が死力を盡くして抵抗し、其の砲兵及び戰車は屢々獨軍に向つて反擊を加へ、「ソンム」河畔に壯烈なる迎擊戰が展開された。獨空軍の急降下爆擊は後方より續々來援した敵密集部隊を混亂せしめた。更に中部フランスの重要なる飛行場、軍港兼商港である「キルボルウォー」を爆擊し、主として後方攪亂に努めた。

佛の空軍も大擧して「ソンム」戰線の上空に現はれ、獨空軍と入り亂れて空中戰が展開された。獨の誇る鉛筆「ドルニエ」の幾十の編隊群は悠々と佛の「ミューロー」、「ポテー」、「アンリオ」型の戰鬪機を邀へ擊ち、何れも機銃の掃射に死鬪を盡くした。佛空軍は四十九機擊墜され、獨空軍も十九機を亡ひ遂に勝敗は決した。

かくて「ボック」集團軍は至るところに激戰を交へ、「ソンム」河を强行渡河して「ウエーガン」陣地に肉迫した。

「ウエーガン」陣地は突破せらる

六月七日早曉より獨軍は「ボック」軍を以て、佛軍の左翼に「ルンデステット」軍を以て其の右翼に、各〻攻撃の重點を指向し全砲兵約千有餘門の大小砲を以て敵陣を砲撃し、空軍は全力を擧げて地上部隊掩護のため、「ソンム」、「エーヌ」河南側地區で地上戰鬪に參加し、佛の增援部隊、歩、砲兵陣地を攻撃して多大の戰果を收めた。

他方「ヴェルダン」方向より「マヂノ・ライン」要塞に突進して背後より守備軍を捕捉せんとする「クライスト」軍、「グーラリアン」機甲兵團は一意邁進した。激烈なる戰鬪を交ゆること三日、「ウエーガン」陣地は完膚なきまでに粉碎され、殊に志氣全く衰へ戰意を喪失しある佛軍に、獨の戰車兵團の突進、空軍の爆撃に支離四散して、第一日の攻撃に忽ち十粁正面は穿貫突破の破綻をうけ、「エーヌ」南岸に急設した「トーチカ」は殆んど占領せられた。引つゞき獨軍は戰果を擴大して「ウエーガン」陣地を完全に突破清掃して、全く鎧袖一觸の猛威を發揮した。

獨軍の追撃！　進撃！

海岸地區への突進

空軍の活躍

空軍は其の集中的で、且指揮の緊密なる集團攻撃によつて、敵の反撃準備中の歩兵部隊、戰車部隊に痛烈なる襲撃を決行し、其の企圖を挫折せしめ地上部隊の戰果を何等の顧慮なく完遂せしめた。殊に巴里方面より軍事輸送列車の續々と進行しあるを認め、其の線路を切斷し、列車を爆撃して粉碎せしめたるは、敵の豫備軍の移動により獨軍の突破地區增援を不可能にした。

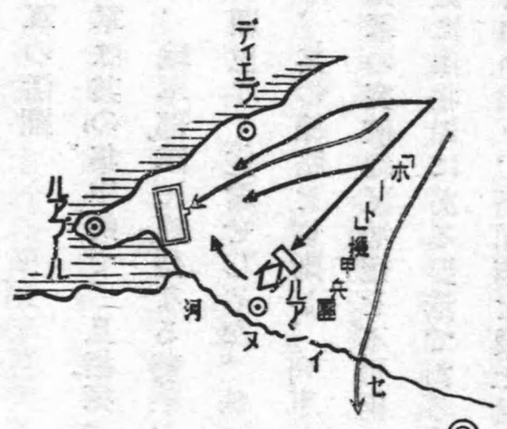
更に佛北岸にある要港である「キルボウォフ」港、「ルアブール」軍港を襲ひ港灣施設、石油タンク、船舶等を炎上せしめた。

機械化兵團の突進！

「ホート」大將の指揮する快速機械化兵團は敵陣地を突破すると、直ちに一擧疾驅して

其の日の夕刻「セーヌ」河下流の「ルアン」に驀進した。佛の敗殘軍はこの快速部隊のため退路を遮斷された、海岸方面に遁げこんだ部隊は、「ディエプ」―「ルアン」―「ルアブル」の三角地帶に追ひ込められて、包圍せられ遂に殲滅した。

各軍團は遁ぐる佛軍を追擊して「パリ」を目指して進擊した。



「シャンパーニュ」の戰鬪

獨逸軍の戰鬪正面は將に三百五十粁に亙つて展開された。作戰は右翼軍は「ソンム」を强行渡河して海岸地區に進出し、各主要な港灣を收め、主力は巴里に向ふため、「セーヌ」―「マルヌ」河の下流方向に突進した。

左翼軍たる「ルンデスラット」集團軍は「エーヌ」河を突破後、「シャンパーニュ」地方に進出し「クライスト」、「グーデリンアン」の兩快速兵團は、其の戰車部隊と機械化兵部隊を「ツール」、「サンデエー」に進出し、「マヂノ・ライン」要塞の背後に迫らんとしてゐる。四半世紀の短き間に獨軍は三度「マルヌ」河を渡河したのである。

この快速兵團は至るところ佛軍の後衛部隊と衝突したが、常に其の退路の先に進出して、多くは捕捉して降伏せしめた。更に佛軍主力に追及して周章狼狽せる本隊に不意に强襲し、甚大なる打擊を與へた後、數日に亙り佛の東部地區を突破し、數日に亙つて活躍し瑞西の國境に進出した。

佛軍の抵抗力全く沮喪す

六月十一日は「セイム」河口より東部「マヂノ」要塞に亙る廣大なる地區に亙り、全佛軍と獨逸軍との間に大會戰は全面的に繼續された。が獨軍の右翼、中央方面では連續猛烈なる空、陸の追擊戰が行はれ、一歩〳〵巴里に近迫したが、左翼方面の「ランス」、「シャロン」方面では、激烈なる交戰中で勝敗容易に決しないが、獨軍は有利に展開さ

れつゝあることは明瞭であつた。莫大なる死傷、甚大なる人的、物的損害は佛軍の抗戰力を日增に沮喪せしめてゐる。其の戰證として中尉「フォールカー・ペッケルマン」が、敵の戰車群の退走中の側面に偶然進出した。中尉は何等遲疑することなく僅か一中隊の步兵でこれを襲擊した。佛戰車群は已に戰意を缺いてゐたため、勇敢なる中尉の攻擊に屈伏して八臺共降伏した。

「パリー」に僅か二十粁！

雪崩をうつて敗退する佛軍を獨軍獨特の追擊戰法で、至る所に捕捉して殲滅した。「キュヘル」軍は巴里の下流で「セーヌ」河を數ヶ所にて迅速に渡河した。

巴里直接防禦陣地は一蹴せらる

「セーヌ」河と「マルヌ」河を利用し、築かれたる「パリ」直接防衛陣地は、殆んど價値なき抵抗陣地であつた。獨軍の先頭部隊は已に巴里を去る二十粁の地點に到達した。

一九一八年の屈辱的休戰協定の舞臺であつた「コンピエーヌ」の森、及び「ヴエルサイユ」は獨軍の手に陷ちた。

獨軍は今や潮のやうに巴里を目ざして進擊し、十三日の夕刻には全軍殆んど「マルヌ」河畔に到達した。

巴里は眼前指顧の間に夕暗に包まれて望むことが出來た。あの煌々たる電燈は消へて一見死の都と化し、唯大厦高樓が雲際に聳へて高く形態を宿してゐる。

二三、「マヂノ・ライン」要塞を突破し東佛に進入す

任務上「レーブ」元帥の集團軍は、開戰以來專ら「ライン」河の邊りに位置し、佛國の「マヂノ・ライン」要塞を監視し、其の友軍たる「ボック」集團軍や、「ルンデンステット」集團軍の、華々しき蘭、白の征服「フランダース」の殲滅戰、佛本國の壞滅戰と無敵獨軍の眞價を發揮する間、隱忍自重して彼等友軍が其の側背より佛軍の脅威を受くる心配を與へず、泰然として其の押へに腕を扼し齒を嚙み殺して辛抱し、只管戰果の擴大を

祈ること一ヶ月。

愈、獨軍が佛國全土の攻略に新作戰を開始するや、時至れりと奮然立あがつた。

難攻不落と稱する「マヂノライン」要塞を突破することである。

「ウイツレーベン」大將の第一軍は「ザールブルツケン」南方の「マヂノ」線を突破した。（要圖參照）

時は六月十四日（獨主力軍巴里入城の日）

巴里防禦陣地の高射砲陣地

使用した兵力

三軍團で第一線に六—七師團、戰果を左右に擴張するため三—四師團

戰車部隊は殆んど使用せず、重砲は三十サンチ程度のものであつた。

第一線各師團は全然交代なく、一齊に渡河材料を準備して强行渡河を決行し、第一日には約五—一五粁進出した。

佛軍の守備兵力は約二十餘ヶ師團で、尙ほ後方に野戰師團が同數ぐらい位置してゐたが、獨主力軍が後方から進出したので、移動して當時はゐなかつた。

かくて獨の第一線師團は遮二無二敵の既設陣地を攻擊し、第二日には概ね突破を終り軍としては約三十五粁の正面を突破した。

「コルマール」附近の「マヂノ」突破

「ドルマン」大將の第七軍は翌十五日に、「スイス」國境に近き「コルマール」附近の「マヂノ」陣地突破を敢行した。

使用兵力

約三軍團、第一回渡河には約二師團を第一線として引きつゞき三師團を渡河せしめた。

第一日は天候不良にて降雨あり、川霧深く兩岸に立ち上りあるを利用し、謂ゆる渡河攻撃で佛軍の死力を盡しての抵抗を排除しつゝ、全軍浮舟によつて「ライン」河の流速三米五〇の急流なれば漕渡は出來ぬので、全部機航で午前十時我が砲兵の掩護射撃の下に、一齊に敵岸に向つて進發し、河幅約二百米を渡り上陸、直ちに「トーチカ」に突進し、最も强固な「ザールベン」堡壘を破壞して占領した。

獨空軍は何れも惡天候を冒し、常に最大級の爆彈を以て、要塞の諸施設石炭庫、砲兵、歩兵陣地を雨霰と爆撃し、且敵の砲火を沈默せしめた。かくて兩軍は逸早く「マヂノ」要塞の背後に迫り片端から降伏せしめた。

二四、獨軍巴里に入城す（六月十四日）

佛國政府は十三日發表して曰く

「ウエーガン」陣地は跪くも一舉に突破せられ、獨軍はひたむきに首都巴里を目指して進み、其の兵力百乃至百五十師團は東、北、西の三方面より半圓形に肉迫し、危機全く眼前に迫る！

巴里守備軍は「フランス」文化の精粹たる巴里が、戰禍により一朝にして破壞されるのを恐れ、遂に巴里放棄に決し、軍事工場も移動せしめ國際法規上の所謂無防備都市たらしむるやう佛軍は巴里を撤退するに至つた。

この趣旨は駐佛「フリッド」米大使により獨國政府に通達された。

「エーヌ」河畔に設けたる佛軍主陣地たる「モンテメヂー」―「ロン」―「ブヂイ」間は突然に崩壞したため、首都を防衞せんとする佛軍の根本的企圖は全く水泡に歸した。そのため巴里を流血の慘より救ひ、文化の精粹を保存せんとして無防備都市と稱するに至つた。

十三日夕には已に獨軍の「キュヘル」軍は早くも城門に迫り、翌十四日には赫々たる戰勝を獲ち得たる獨軍は、堂々巴里の凱旋門を通つて入城した。

佛蘭西大遠征の第二幕、は佛軍北部戰線の抵抗力の崩壞によつて一段落はついた。

然し獨の戰車及機械化部隊は、尙ほ各地に於て佛の後退部隊を擊破しつゝ南進、又は西進を續け、敵は算を亂して各所に敗退した。

敵軍を最後に殲滅すべき地中海に至る突破作戰は、更に第三幕の段階として新に獨最高統帥は考慮した。

思へば一八七一年普王を先頭に「モルトケ」將軍、「ビスマーク」鐵血宰相等が轡をならべて巴里凱旋門を意氣揚々と入城し、獨逸の運命を構成して以來七十年目の入城である。輝しき歷史は再び獨逸の頭上に燦として光を放つた。一九一九年の獨逸の屈辱を決定した。かの、「ヴルサイユ」の城頭にも今は高々と「ドイツ」國旗が翻へつた。獨逸國は歡喜に滿ちた！

佛國政府首腦引揚と、その前夜（獨軍從軍記者アレフレッド・ゲーリック）

如何に佛政府が獨軍襲來の危機に直面した際、どんな樣子であつたかを描寫して見やう。

首相官邸の守衛君

「議員の六日の手當は八日から支拂はれると言ふことだ。會計課では午前十時から六時まで事務を取扱ふそうだ」

守衛はそう言ふて入口の椅子に寢そべつて、黑闇の何物かを凝つと見入つてゐた。首相「レイノー」氏の官邸の鎧戸の蔭にまだ電燈の點いてゐる樣子が、左側の方に明るく見える。首相はよく晩遲くまで仕事をするのだ、最早疑ふ餘地はない。首相も外相も陸相も一緒だ、非常に沈痛な顏を向き合つてひそ〳〵話をしてゐる。

守衛はうんざりした。もう一度椅子に戻つた。彼には今問題が山積してゐるのだ。一人の息子は動員應召されてこのかた一ケ月餘りは何んの音信もない。生死も不明だ。嫁は行囊を背にしてこの四、五日「アンヂェー」の方へ出稼ぎに行つてゐる。それに二人の孫も學校は放つぽらして三週間も行衛不明で、未だに居所が判らないときてゐる。兎に角自分だけは、俸給を引き出せる裡は、此處に履み止まつてゐるより外に處置はあるまい。巴里は今夜は眠るどころの騷ぎぢやない。六月八日の夜は鏘詰だ、巴里はどこへゆく。今や眞劍にその行手を考へだしたのだ！

內相「マンデル」氏

權勢ぶつた、灰色の自動車が「ヴイクトル・ユーゴー」六九街のある邸宅の前に止まつた。時は眞夜中である。「マンデル」內務大臣は事務官や理事官と記錄の搬出方を相談して歸宅したのであつた。運轉手につゞいて「セネガル」生れの「ネグロ」が車から飛び降りて、車の戸を披けた。大臣は「ブリベット」氏を伴ふて無雜作に車を降りた。「ブリベット」氏は大臣の身邊護衛に當つてゐる特高刑事で、信任の厚い男である。大臣は

言も言はず、困惑の色を浮べた儘昇降機に乘つた。「ブリベット」氏は慇懃に尋ねた。

「何時もの御仕事ですか？」

「マンデル」氏はむきつけに頷いて見せた

「邸内をよく巡視するのだ。廊下の警戒を怠らぬやうに」

から言つて如何にも心配そうな顔をしてゐる。大きな從僕ネグロ人は昇降機に入つて二階までの「ボタン」を押した。

大臣「マンデル」氏の何時もの癖で昇降機と室との間を足速やに歩いた。「ブリベット」が先きに立つて電燈に「スキッチ」を入れる。書齋が明るくなつた。このことがとても主人に嬉しげに見へた。光線が頭上の書架に立並んだ書籍の暗紅色の背革を照らし、深紅色の衣裳を著けた、「リッヒリウ」の肖像畫と數歩離れた片側の壁面にかゝつてゐる、「マザリン」の繪が浮み出た。周密な配慮のもとにこの繪はかけてあるので、此の室に入つて來る訪客で歐羅巴佛蘭西政策の共鳴達の眼には必ず映るのである。

「ヂャコム」も「ユミリー」も起きなさい！　と大きな聲で呼び起しながら「マンデル」氏は書齋に入つた。そして直ぐ机の上と書籍の背革に眼をやつた。さあどれを持ち出さなければならぬ大事なものか？　と考へ出した。勿論こゝにある書類は私的のものではあるが、政策に關するものが少くない。隅々まで金具で包んだ古い机の廣い抽出の中には、文字のかすれて消へかゝつた紙片が幾枚もはいつてゐる。これこそ今日迄「フランス」の時の權力を支配するにあづかつて緊要なものばかりであつた。

政治家には殆んど女と金錢に妥協しない者とては稀である。これに慣れた者は議員を自分の意志通り操縱するのは容易なことで、過ぐる樂しい記錄を喚起さすやうな書類が澤山あつた。

内相夫人「ベアトリ」の其の夜の逃げ支度！

慌ただしく目を醒された伊太利生れの召使は、「ピヂャマ」の上に明るい色彩の化粧著をつけて現はれた。

「トラックだ、ヂやコも！　衣類を詰めた二個と、書齋と此處にある、スーツケースだ……待て、「ブリッティ」夫人を電話に呼べ」

さう言つて男の召使から受話器を奪ひとつた。

「ベートライスかね？　待つたかい？　お聽きよ、妾達はもう逃げるんだ！　うむ、何時つて？　明日か明後日だね、兎に角、軍部では巴里はもう支へ切れないと觀念したんだよ……「ボルドウ」にはまだ行けない、まづ最初は「ツール」だね、（ツールは佛中部の都）お前？　「クロード」の免倒見たつて？　ぢや、「ビアリッツ」だね、いいよ、此方も願つたりだ、ぢや急いでね」

萬事その通り運ばれた。「ベアトリ」夫人は早速老齡の召使に電話をかけ、それから、この、「ル・デ・ラ・ボムペ」の薄暗い「アバート」で棚の中の物を懸命に「トランク」に詰め込んだ。が、彼女には不審があつた。直ぐに「ビャリッツ」へ？　これは、一體政策上とか軍部の計畫のためだろうか？　若しそうでなかつたとしたら、もう、二人が逢つてから數年になるし、男の愛情の濃さも消へる頃だ「ベートライス」ももう四十五歳だ……ふむ、妙な感傷癖は捨てる頃か、そこへ、いぢけた、縮れ毛を額に亂して、心配そうに召使が又現はれた。

「トランクをお詰めよ、「エミール」よ褐色の旅行服に運動服ね、あの明るい灰色に紺の堅縞の入つたの、それから、夜會服に合「オーヴァ」と、毛皮のコートを忘れないでね」

老婦人は躊躇するやうに戸口に立ち止まつた。

「まあ！　そんなに長く御旅行なんですか」

「妾もいやなんだけど、でも準備して置かねばならない事態になつたのよ」

「ぢや、妾達はどうすれば宜いのでしやう、奥さん」

これは内務大臣「マンデル」氏の家庭内に遽かに起つた一場面の光景であつた。

「誰か家に殘る人がゐるかね、獨逸の兵隊はお前に暴行なんかしないから安心おし、

「ヂャコモ」も伊太利人だし、お前も「アルサス」から來たんだろう？　萬が一のことがあつたら、警視總監の「ランガロン」さんにお電話したら宜い、」「ネグロ」に合圖して、僅かの間に祕密の手帳や私信の類が袋の中に入れられてしまつた。

「クレマンソー」に關する記錄！　これは後に遺して置かない方がよい、內相「マンデル」氏は暫く書齋の「ドアー」の近くの壁に懸つた「クレマンソー」の彫刻に瞳を据へた。この「虎」は無數の短劍を兩手に持つて、塹壕を匍ひ上ろうとしてゐる。その塹壕の掩蔽部の入口には「敗戰主義者の塹壕」と書いた警句が彫り付けてある。この「マンデル」は敗戰主義者の反對を押切つて、佛蘭西を戰爭に導いた、自分としてその精力も氣魄も決してこの大先輩に劣るものではない。牢獄に繫る幾十人の政治犯人も自分が內相の椅子を占めてから、幾倍かに增加した。

官吏の罷免、轉任、賣國奴への重刑も、自分が統御に當つてからは何等の障碍に會はず思ふ通り遂行が出來た。併しこの文化人である非戰論者に對する自分の鬪爭は如何なる效果を生んだであらうか？

「クレマンソー」は自分より精力の點で勝れてゐたのか？　それとも、兵士に對する處置にもつと堅い決心があつたのか？　一時は全佛軍の總帥で飛ぶ鳥落す勢のあつた「ガムラン」將軍も追放された。併し他の將軍と雖も彼以上ではないのだ。

彼の冥想はは再び「クレマンソー」へ

「マンデル」內相は机の傍の「クレマンソー」の肖像畫に眼を移した。「虎」のこの獻題は彼自身の手蹟になつたものである。「マンデル」は考へた。併し「クレマンソー」は自身ではこの獻題から考へらるるやうな人物でなかつたことを充分知つてゐなかつたと思ふた。一般大衆は「クレマンソー」に向つて、醜惡な言葉を弄しながら囁き交すのを樂しむのである。その言葉は善良なる社會では到底聽けるものではないが、「マンデル」はこの言葉が耳に殘つてゐるのに敢てこの地位についたのである。

彼は「クレマンソー」への作り話が彼の周圍を取卷いてゐるが故に自ら努力戒飾した。

彼は堅く結んだ口唇でひそかに微笑した。そして更にこの話を助長伸展さした、遂に或る者は彼の傍でその聖骨が敎へたものゝやうに、「虎」と彼とは無二の親友であつたと信ぜしむるまでになつたのである。

書齋には「クレマンソー」の肖像畫、寢室にはその死面、居間には寫眞を、殊に「クレマンソー」が風呂に漬つた「デッサン」（素描）をいみじくも蒐集し得たものだと誰からも推賞されてゐた。

が、「クレマンソー」が若し彼の素描が「マンデル」のそれや、又無躾にも着物のない裸像を少女達の繪と同列に帖られたのを見たら、彼は齒を喰ひしばつてそれこそ「虎」のやうに怒るだろう。いや、現在彼が、自分の地位にゐたならどれ程腹を立てたことであろう。

「クレマンソー」には有名な句がある！　巴里の前面で戰へ！　巴里の中で戰へ！巴里の背後で戰へ！　と叫んだ、「マンデル」には何が出來たか、彼はこの大先輩に倣ふ何物があつたか？

彼は書類の綴り込みと書籍の前を歩いていた。再び此處に戻つて來る迄に必要なもので忘れたものは何もないか？　再び歸り來る日はいつか？

一體此の場合何が彼にそんな事を彼に言はしめたであらうか？　何時か下院で十人の代議士の中からたつた一人反戰の投票をした者がゐたが、その男は今頃どう考へてゐるだろう。

「我々は永い間宣傳に懸命であつた。そして今、その宣傳を自分等自身も信ずるやうに至つたのである」と、然り彼はそう信じた。若しこれを信じないとあらば彼の目前に展げる途は何んであると云ふのか？

彼は奥の室に歩いて行つた。「クローデス」の室から何を持ち出そうとするのであろうか、多分愛兒に會ふといふのであろう。

その時その瞳は、ピアノの上に飾られた、紺の服を著けた少女の繪「クローデス」の姿

に見入つた。戰爭勃發すると同時に彼はこの少女を「スペイン」國境の方に避難させたのである。安全地帶に匿まうといふのは誠に結構な話で、爆擊の御見舞を受くる心配はないし、皆が其處に避難したがつてゐる所だから、命に別條あらう筈はない。「マンデル」大臣はこの娘をひどく可愛いがつたものだ、それといふのも、この娘は「ベートライス」夫人との戀愛關係から生れた、特種の子供であるからだ。

彼は寢室に戻つて來た。

「トランクの準備は出來たかね？……うむ、宜しい、お前は暫らく此處にゐて呉れ、それから「リッヂ」に電話して自分は今晩此處に泊るからと傳へて呉れ」

六月十三日の夕刻數名の兵士が內相官邸に現はれた。

「御命令によりトランクを運搬に參りました」

斯くて夕闇の迫る頃、「マンデル」大臣は五つのトランクと一緒に「セネガル」生れの黑坊と特高刑事とを同伴して巴里を逃亡したのである。

佛首相「レイノー」煩悶！

「ポルテ」夫人は六本目の卷煙草を灰皿にこすりつけた所であつた。御機嫌極めて斜めである。

「もう一度電話して首相を呼んで下さい」

が、召使が電話をかけないうちに、首相「レイノー」は戻つて來たのである。夫人は椅子を跳び上るやうに出迎へた。彼は平素よりも興奮してゐることが直ぐ解つた。眼が据つて、時々、ひよこ〳〵頭を振るのだ。

「お前「ペタン」將軍にお會ひ出來たかい？」

斯ふ質ねた結果は彼の心臟を押付けてゐる心配を倍加する許りであつた。「ポルテ」夫人は首を振つた。

「將軍は妾をお通し下さらないんです、御疲れが激しいからつて！」

「ふむ、子供扱ひにしたね、もう元首になつたつもりかな」

「レイノー」はくどい言ひ廻しの好きな男である、時々同僚に用ひる言葉で神經を惱ま
した擧句に出る話術なのである。
「お前は「メヌトレル」秘書に、お前が何を「ペタン」將軍に話したいと云ふ要件を」
「それがよく聽いて呉れないんです、貴男だつて現在の狀態がどんなだかお解りでせ
うに」
この「ポテル」夫人は常々「レイノー」の使者兼秘書として國内の政治問題に携つて、「レ
イノー」を助け、時には外交の役まで引受けることが度々であつた。先きに「レイノー」
の睨みが軍部に利かなくなつて、いろ〳〵の面倒な事件が起るやうになつてからは、
屢、調停役に遣はされたものである。軍部方面の難礁といふのは「ペタン」、「ウエーガ
ン」の兩將軍の關係で、この兩巨頭は主戰論者の首相に休戰條約に據つて對立してゐ
るのだ、誰一人「レイノー」の意見に從ふ者がゐなくなつてからは、この夫人だけがそ
の才能と舊い緣故を辿つて、要路の人々の間に、彼の意見を漸く說明してゐるのであ
る。
「レイノー」は例の首を振る癖を出しながら（これは餘程己れの思案に困亂した時の癖
である）凝つと考へ込んだ。
「よし若しこの將軍達が予の意見を聽かぬとあれば斷乎馘首する許りだ！」
と、つぶやきながら書架の前に佇づんで、其處に飾られた東洋風の靑銅作りの假面に
目をやつた。それは放漫しある現在の頭の中の思索を纏めんとするためであつた。
一體大巴里市の諸新聞は何を此の頃書立ててゐるだろうか、新聞に揭げられた彼の「ス
ケッチ」はこの假面の一つと同じでなからうか？
〝汝自身で判斷せよ〟　彼の顏はこの印度支那から持ち歸つた假面の鋭い面貌に似て
くるではなからうか？　片々支離として未だ纏らない思策に、思はず彼は苦笑せざる
を得なくなつた。
斯ふして彼が室の中を歩るき廻つてゐる間、「ボルテー」夫人は默つて彼の動作を見守

つてゐた。書齋の壁に掲げられた世界大地圖、隣室の寢臺の上に擴げた歐羅巴地圖、寢室の箪笥の白い抽出、それから机の上に置いた手垢に汚れたボール、「レイノー」著作の〝佛蘭西陸軍の問題〟總てこれらは妻領よく整頓せられてゐるが、併しこの書籍と、灰皿から卷煙草の吸ひかけがのぞいて、ゐなかつたら、恰度家具屋の陳列に過ぎないのだ。一寸見た所趣味を凝らした室ではあるが、普通の家庭に見る雰圍氣は些しもない。それは凡て設計屋任せの飾り立てであつた。突如彼は夫人に言ふた「吾々は明朝出發するのだ、祕書官はもう出發してゐる、「トランク」の荷物は宜いだらうか？もう何時取りに來るかも知れんよ」

巴里の新聞は「レイノー」首相をいつも親父といふ！

巴里の新聞は首相を好々翁の親父と見たてゝゐる。それはよく、娘をつれたり、婿と一緒に歩いたりする圖を新聞に掲載したものだ。

事實彼は役所に詰め切りの時が多いので、「ブラス・デュー・バレーブルボン」の男許りの住んでゐる近處の「アパート」に住込んでゐることが多い。彼の妻君と雖滅多に訪れることは出來ない位であつた。が、然し稀にこの「アパート」をのぞいて見ると「ポレラ」夫人はゐて一切を切廻してゐるのである。このことは首相の二、三の友人を除いては誰もこの事實を知つてゐるものはない。

「ポレラ」夫人は「まだお仕事をお續けなさるんですか」

「ドゴール」將軍が今夜自分を陸軍省で待つてゐるのぢや、「ウェーガン」將軍の名前が必要なくなるかどうかといふのか、彼は予の最も信頼する唯一人の主戰論者ぢやないか！　ふむ、これや素晴らしい妙案ぢや、彼を倫敦に遣はさずばなるまい。「ウェーガン」將軍は英國の援助なくてはやつて行けないで喃、が、「ドゴール」將軍が遠くへ行つたら誰が敗戰主義者達を繰つて命令を下すのであらう、これや自分が戰爭に勝つたら事態を一掃せねやならんわい」

「ポテル」夫人は立ち上がつて

「あんまり遲くなると準備が出來んから、妾は今からすぐ「トランク」を詰めましょう」

戰爭に對する計畫と準備は殆んど捨ておいて、自身のことだけには凡て周密にせねばならぬ程佛國は行き詰つた、これが宰相の行くべき道か？

暗黑の巴里郊外の自動車道路を、今二臺の自動車は「スピード」を出して南へ南へと走つてる。車の中でこんな會話が交はされてゐる。

「妾達はこんな眞黑な旅行をする必要がなぜあるだらう、先きに逃げた人達はちつとも危かしい目にもあわんで行つたぢやないか？」

「ラヴァール」（現副總理）を見なさい、あ奴は、國家の危局を他にして四、五日前に逃げたんぢやないか、こんなに遲くまで踏み止まつて、この眞夜中に引揚げるのは我輩のみぢや……」

言ふまでもない、車中の會話は「レイノー」首相と「ボレテー」夫人であつた。

陷落前の巴里光景

巴里を遁げ出す數千臺の荷車も、「セーヌ」河の「セント・ルイス」島に立寄るものもなく、巴里附近全體を蔽ふ鈍い騷音となり、休息を知らぬものゝやうに、恐怖と焦燥が、巴里に住む數百萬の人々の間に充滿した。貧しきものは、「リュックサック」と自轉車で遁亡の準備に忙殺され、車道も人道も押すな〳〵の大混雜で、所々に婦女子の悲鳴がけたましくきこへて來る。巴里は全く混亂に陷入つた。

工場と云ふ工場は全部閉鎖され、機械も物資も遠くに運搬された。仕事と賃金に執著を持つて離れにくい極少數の人々は、まだ巴里に殘つてゐる人もある、が、然し間もなく遠くに連れ出されたに違ひない。これもまたよいことだ、工場を引拂ひ、物資を他の地方に運び、職工を南部に再び集結すれば、眼前に迫つた獨軍が巴里入城後には何等彼等は役立たぬからである。

「ブルム」外相と獨逸に關する書籍？

佛外相「レオン・ブルム」は今彼の書齋に深き思に沈んでゐた。室は書籍の累積だ。ぶ

んと埃りぽつい臭ひのするのは、中央の「ホール」も天井から床まで本が一杯二列に書架に納まつてゐるほかに、卓子も椅子にも、一杯ひろげられてあるからだ。

それが殆んど獨逸に關する書籍で、懸命に研究を續けて來たものだ、彼の研究によれば獨逸の敗北は疑ふ餘地がないのであつた？　獨逸に關する資料は「ロースチニ」によつて極力蒐集した、「ストレッサー」も「エミール・ルウドウイ」もこれは單に時の問題であると斷言してゐた。彼は興奮して立上つた。

その時、がたんと戸を締る大きな音が臺所から聽へた。年老いたる昔からゐる門衛が閉めた音で。現在此の家に殘つてゐるたつた一人の男だ。祕書も召使も既に遁亡してゐないのだ。「トランク」の荷造りはもうすつかり終つて。口があいてゐるのは彼の小さな「スーツケース」だけである。何か紀念の品でも納れやうと言ふのであらう？

抽出から絨氈商會の一件書類の包んである袋を取り出した、これは世界博覽會に景氣をつけるため、いろ〳〵計畫した時この商會との交渉をした關係書類であるが、思へば自分の身について妙な醜聞を流したのもその頃で、人民戰線派の政府が、どさくさ騷ぎで、有耶無耶になつてしまつた。そんなことを考へてゐた時、突然「デルボス」が入つて來て非常に興奮して、額の汗を拭きながら言ふた。

「エリオットもヂャンヌネー」も、もう逃げましたぞ、「ダラジエーはクルッソー」侯爵夫人同伴で、これもとつくに逃亡し、もうあとには誰れも居ませんよ」

この「デルボス」と云ふ男は、この數年間社會主義派と、理論派の首領との間を、密接に提携さすために活動するのが彼の商賣である。「ブラム」外相は彼に椅子を與へ憐憫と賞讃とを相半した大きな眼鏡をかけた眼で「テルボス」の顏を覗き込んだ、何んでも先年「ブラム」が首相として內閣を組織した時、數多くの反對を押しきり、多くの候補者を却けて、この「デルボス」を外務大臣に据へた所から、理論派の連中は嘲笑を以て迎へたことがある、その時自分は言ふた「我輩には小使が必要だよ」と言つてのけた、やはり彼は善良で忠實なればこそ、今夜迄居殘つて、自分の身につきまとひ、心配し

で呉れてゐるのだ、自分は言ふた。

「運轉手さへ來れば直ぐ出發するよ、外の連中は準備は出來たかな」

そう言ふて「レオン」外相は人名簿を繰り擴げて友人の名前を拾ひ上げ、その友人と一緒に逃亡する積りで、運轉手の來るのを待つた。

彼は豪華な「ゴブラン」織の前に立つて、濃厚な綠と紺で描いた風景畫を見入つた、それから書架の前に立つと、其處には彼の誕生日を祝ふて、小さな姪から贈つて呉れた、花と兎と小鳥を、明るい金色と、紅と紺で描いた小さな繪が掛かつてゐる。

曾て彼の家族は、今は破産した「レオ・ミュール」絹會社に彼を沒頭せしめたことがあつたが、印象と云ふものは不思議なもので、この嵩張つた書籍の上に置いた小さな繪が、高價な家具や、「ゴブラン」や「グランドピャノ」のと同樣に、思ひ出深く、こゝに置かれてあるのは、人情と云ふ點からであつたらう。

突然電話があつた、「レオン」外相はせき込むやうに問ふた。

「何か英國からニュースが入つたか？」

「勞働黨が大部進出して來ました」

「それや好都合だ、フランスの國民にも英國と一緒になつて、確り支持せにやならん」

と說くのに容易になつた、反對黨の態度はどうであつたらうか？」

「反對黨も戰爭の永續することは覺悟してゐますから、さしたる事もないと言ふことです」

「チャーチル首相の觀測は？」

「問題は依然として內閣に止まるかどうかにあるですね、勿論英國が敗北することはありませんよ、これが其の運命を決する重要な點ですからね。」

佛國としては「ブラム」外相が數年の間極力主戰を唱へて「獨逸に宣戰を布告すべし」といきまいた結果、今日が來た、戰場の勝敗は兵隊の責任である、自分は軍隊の指揮はせぬ、して見ると責任は誰？

この時門前に急に自動車が突込んで來た。二人は遽てゝ立上つた、それでも「ブラム」外相は稍々沈默を取戻して、彼は電燈を消した。

「おい、運轉手、早く〳〵」

運轉手は忙てゝ荷物を運び、續いて眞闇の街を一目散に走つて行つた。

前聯合軍總司令官「ガムラン」將軍

「宜しい、ぢや、「ドールドン」でも「ペリゲー」でも、「ガブリオー」にでも出かけよう、一時は平和に過せるだらう」

「ガムラン」將軍はしみ〳〵と夫人に話しかけてゐる。彼は選拔隊に着せる粹な軍服を著てゐたが、この人にはぴつたりとしない。であるから、彼は何時もこの服を着けたことがないのだ。

「それはもう解かつたんだよ」そうだらう？　暫らくなんだ、「ウエーガン」將軍（ガムラン將軍に代つて軍司令官となつたマキシム・ウエーガン大將）が萬事巧くやるよ、遲かれ早かれのことだけで問題ぢやないんだ」

四、五日前までは聯合軍最高指揮官だつた、この將軍は、殆んど自分に言ふやうに後任者たる「ウエーガン」大將に最大な確信を置いてゐるのだ、自己の意志に反した指揮官、それは露骨に自分の良心が指してゐる、そして自分が今被免されたことに不滿足ではなかつた。

巴里否全佛國では「ガムラン」將軍は自殺した？　と云ふと噂が一般に擴まつた、反逆罪で捕縛されたとか、射殺されたとかいろ〳〵なデマがとんだ、が、將軍はこの噂を考へながら、怪奇な微笑を口邊に泛べてゐたのである、自殺？　捕縛？　追放？　然し彼を動かすことの出來る者は彼が冷靜自寂として現存してゐる一つの確證である。

「我輩の手に握つてゐる武器は、我輩が考へることよりは遙かに弱いものである」

とは權威ある人々に彼が開戰後數週間經つて、最初の戰線視察から歸つて來た時に報告した言葉である。

自殺？　自滅？　何れにせよ彼が「ヴアンサーン」の司令部から離れ、參謀本部から姿を消し、愁然として「フォシュ」街の自宅に戻つて、重任から解放されたことを意味する、現在彼は、暫らく休養に、田舍に出掛けやうとしてゐる、然し軍部では彼が過去數年の間寸暇もなく、劇職にあつて、何等の破綻も來さなかつた功績で、やがては復職を考へてゐた、勿論新任總司令官「ウエーガン」將軍は元來戰爭については悲觀論者であつた、それであるから、事戰爭に關しては凡て「ガムラン」將軍の前に持ち出された、彼は數週間と云ふものは、その處理と闘つた。

別室では出發の準備に大童で、立働いてゐる召使達の騷々しい喚き聲が聽へて來る、家具を一緒に運びながら、椅子や、「ソファ」に灰色の埃だらけの蔽をかけてゐた。

永い間彼は家庭にあつて、愉しい平和な時を過したことはなかつた、それが今この住みなれた家を離れる時に僅かに惠まれたのである。

彼の抽出の中には數々の賞狀がはいつてゐる、どれも皆「ペタン」元帥「フッオシュ」元帥、「ピルスデスキー」或は「バネス」と云つた前大戰の聯合軍巨頭連から授與されたもので、その中には陸軍大學卒業の時貰つたものもある。

彼は學校では何時も首席で通した、陸軍士官學校でも同輩を遙かに拔いてゐたものである、然り今こそ、その輝かしい舞臺から姿を消す時であつた、思へば佛陸軍の寵兒も一朝にして落魄する日であつた。

次で彼は大事なものを保管してある室に入つて、勳章の整理にかゝつた、將軍は勳章が大好きであつた「マホガニー」作りの棚には溢れ落ちる程、紺、紅、綠、黑の勳章を納れた小箱が緞子の布の上に置かれてある、前大戰の時、聯合軍側二十數ヶ國から贈られた、最高勳位のもの許りであつた、彼はこれを眺めて感概無量の心持ちで次々ととり出して眺め入つた、「ポーランド」、「ブラヂル」、「チエッコスロヴアキア」さては風變りな白象勳章、旭光燦と輝いた「リヴノン」共和國のものまである。

全部鄭寧に「アルフアベット」順に並べてゐるが、其の字數だけでは最高の敬意を表し

た國々の數に足りない程であつた、その内でも小箱の山をなすのは英國の勳章だつた、そして今又英と手を握つて戰つた。

獨逸が「ポーランド」に攻め入つた時、彼は新聞記者達に自信たつぷりと次のやうに語つた。

「ポーランド」は來春までは抵抗を持續するよ、その間に、英國は二萬の兵を大陸に派遣するに違ひない」

これは彼が閣議でも確信を以て言ひ放つた事であつた、佛國陸軍としては其の作戰計畫から言つて、戰爭を勝利に導く前提としてこれが唯一の念願であつたのである、それが實際はどうであらう、英國の派兵は未だにその兵數の四分の一も送つてゐないのである。

「ガムラン」の邸宅はきれいに、かたづけられて凡ては空つぽである。

このやうにして引越しするのは「オッシュ」街に立並んだ邸宅の中で「ガムラン」の家がたゞ一軒だけだ、數多い外國人、南アメリカの總領事、諸外國の大會社の代表、これらの人々は何も逃亡の必要を認めないので落つき拂つてゐる、彼自身は今は一介の市井人となつたが昨日までは最高指揮官だつたが故に敵手に渡す譯にはいかぬのである。

離京！　これが餘りにも突然だつたので、彼を知る誰も彼も、どうしやうもなかつた「レイノー」首相とは犬猿の仲であるし、「ダラディエー」とも交際は斷つてゐた、然らば彼の協力者は誰か？　彼は一度司令部を出てからは誰一人とも會つてゐない、それは多分身邊の危險を感じたからであらう。

五月十六日獨軍が「アベビール」(北佛「ソンム」河に沿ふ「アミアン」の西北の街)に進擊した時、英の「チャーチル」首相と佛の「レイノー」首相との間に交されたる會話は實に活氣そのものであつた。

「獨の進擊！　それやをかしい、獨の瘠せ兵士一人だつて入つてくるものか、いや絶對にそんなことはない」

「チャーチル」のこの言葉は「レイノー」の反擊を喰つた

「英帝國の運命は、この「アベビール」に入つた瘠兵士に絡むんですがね」

「ガムラン」も側にゐた、そして注告してやつたことは

「獨軍が深く進入すればする程彼等(英)の危險が加はる許りさ」と

「ガムラン」は肩をすぼめた、これ以上又何をか言はん哉であると、今となつて、初めて彼等もその言葉から現在の現實を知つたことであらう、「ガムラン」將軍には何等恥づべきことはない、その威儀を正した父將軍の肖像にも堂々と告別した。

外には凄しい旅行用の自動車が、多くの荷物を積んで待つてゐた、將軍は堂々歩を夫れに運んだ、その頃は自動車の奔流が、何れも北佛方面からやつて來た避難民で、恐らく南佛方面に行つて、救濟を受けやうとするのであらう。

その時「ガムラン」將軍は彼の傍を元氣なく疾驅する騎兵の一團に目をつけた、精根も盡き果てた樣子で些しも生氣がない、自動車の上には埃に汚れ、疲れきつた兵士達が重り合つて坐つてゐる、騎兵の士氣も行軍縱隊のものも凡て意氣消沈沮喪してゐる、遽たゝしい逃亡者の列が唯前へ〳〵と進んでゆく、その重い四輪車が時々立止まつたり、道傍に臥れたりするのは、前に自動車や自轉車や、荷物を背負ふ徒歩の人々によつて混亂してゐるためだ。

解放された將軍としては、眼前にこの大混雜の有樣を見、兵士の士氣が悉く衰へてゐるのを見ると、今迄何等の苦惱もなかつた頭の中に、一種劇烈な刺擊が出來た、とう〳〵眼をそむけた！

南と西に通ずる廣い道路は、この群集で幾夜ともなく埋もれた、隙間と云へば時々自動車、荷車、自轉車の行列の間に見えるばかりである。亦これ以上進めなくなつて、路傍に外れた自動車の上には、人々が昏々と眠りつゞけてゐる、左も右も畑地といふ畑地には、避難者の天幕が見渡す限り張つてある、その何れもが屋根がなく、野天に頭を曝らしたまゝで、それが最上の工夫で命を取り止めやうとしてゐる。

のろ〳〵と歩いて行く避難者の列の傍を、これも重い自動車が通り抜け、前方の天幕の方へ疾つて行く、その「ヘットライト」の鈍い光りがこの人達のために道を照らして呉れるのだつた。

責任がある當然履み止まつて、これらの避難民の處置をなすべき義務ある、軍人も政治家達も已に逃亡して巴里には其の影もない。

かくして佛國壞滅の日は眼前に迫つた。

佛蘭西國内の掃蕩戰（第三次作戰）

二五、巴里陷落後（六月十五日以降）獨軍各地の追擊戰

佛東部進擊掃蕩戰

六月十五日　「ヴエルダン」要塞の陷落！

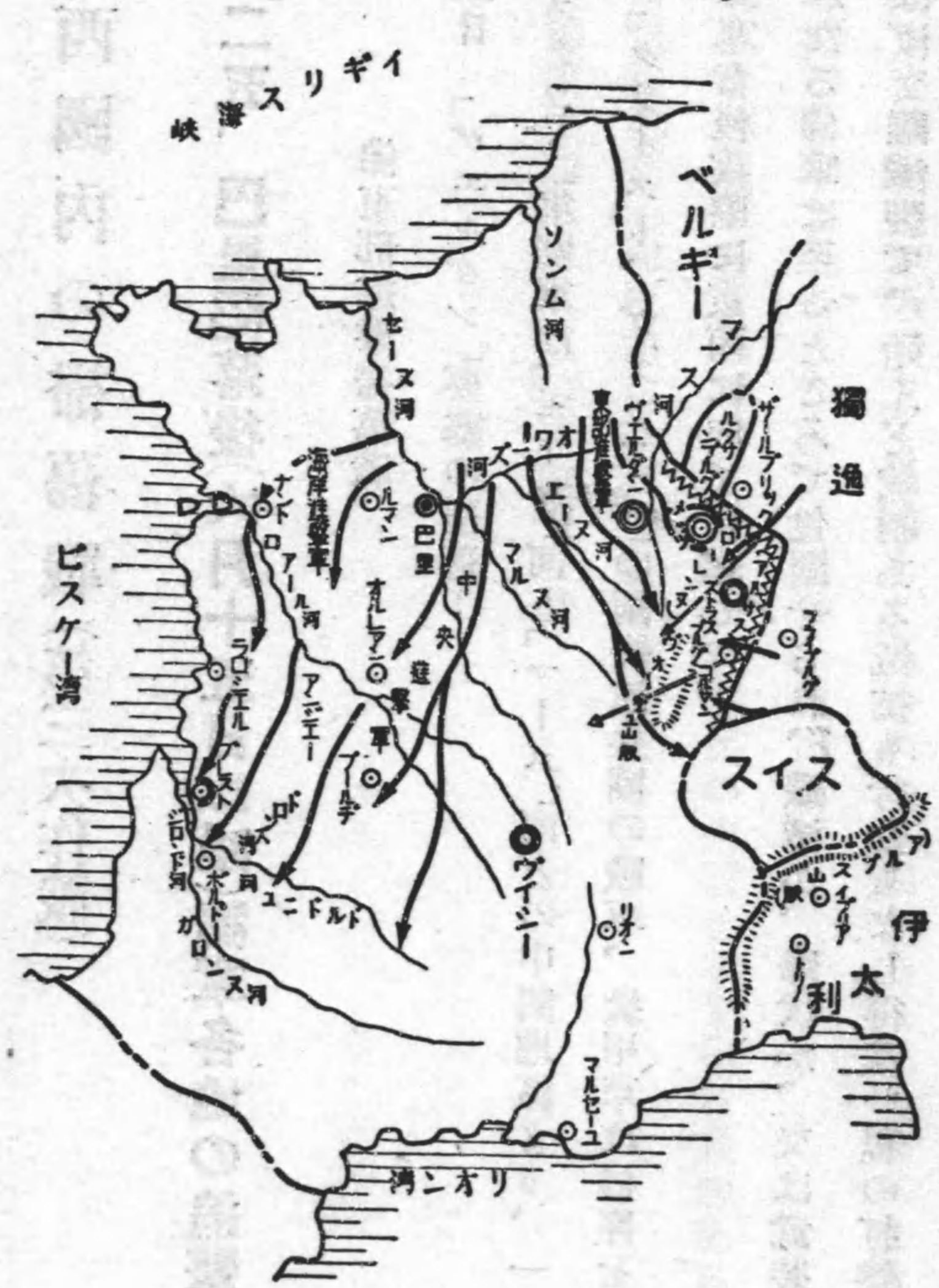
「ルンデステット」集團軍は「セーヌ」河と「マース」河との中間地區より、一齊に追擊に移つた。「クライスト、グテリアン」の兩快速兵團の戰車、裝甲車は砂塵を揚げて「マヂノ」要塞背後攻擊に東西に向て驀進した。

擊破されたる佛軍は至るところで包圍せられ、殲滅か、降伏か、又は武裝を解除された。言はば支離滅裂で、殆んど統制ある抵抗も行動もなし得ない程の打擊を與へた。

最も佛軍としては、最近編成した新軍團は「ソンム」河以北の地區で敗退した、各師團

巴里陥落後獨軍三方面進撃要圖

（自六月十五日至同二十八日）



の残存兵を急遽間に合せに狩り集めて、集結したものか或は補充兵で、未だ訓練未到の新募未熟のものから成りたつた、素質劣等のものが多いのであつた。

從つて六月五日の新作戦開始以來、今日までに捕虜は約二十萬人に上り、兵器機材の鹵獲品は山積して、概算することさへ不可能の狀態である。然し佛東北地區にある、「ヴエルダン」、「メッツ」、「ベルフォール」（要圖參照）の各要塞は頑として死守を續け、四面獨軍に包圍されつゝも抵抗をした。獨空軍は大編隊を以て、これ等要塞に直撃爆彈を雨下し、その附近の密集部隊等に多大の損傷を與へ、各種の列車を破壊し、多數の鐵道線路を切斷して、孤立無援に陥らしめた。

陸上部隊は空軍に呼應し、これら要塞に猛攻を開始し、二十年前獨皇太子軍が五十萬の犠牲を拂ひ、六ヶ月の長時日を費し、尚且陥落せざりし「ヴエルダン」要塞も、遂にこの日白旗を掲げて降伏した。

此の日の突入戦で、狙撃兵隊の「ウェーバー」少尉は堡壘入口附近の爆破導火線五本を

發見し、猛火を犯して突進、これを切斷して我が軍の前進に多大の效果を揚げた。

六月十七日　佛國東部軍包圍殲滅せらる

粉碎せられたる佛諸軍團は獨軍の急追擊に遭ひ、潰亂狀態に陷り、算を亂して主力軍とも見るべき部隊は、南方及西南に雪崩れをうつて潰走し士氣全く喪失した。が、尙ほ整然と抵抗を續ける一部の後衞部隊なり、收容部隊は、甚大なる損害を蒙りたるも、頑强に死守し、獨軍と劍々相摩するまで、勇敢に戰ひ多くは其の場で戰死した。

獨軍師團長の自ら先頭に立つて指揮する「クライスト」機械化兵團の一隊は、「ブルグント」地方及び「ラングル」高地（佛東部國境に近き高地）を越へて突進したゝめ、「ザール」及び「ライン」地方（何れも獨、佛國境ライン河に沿ふ地方）にある「マヂノ」要塞守備軍竝に野戰軍は全く退路を遮斷され、進退谷まり、かくて東部地方「アルサス」「ローレンヌ」にある佛軍は殆んど全部包圍せられ、各所で各個の抗戰は行はれたが、大勢如何ともする能はず、獨の空、陸の猛攻で隨所に降伏又は殲滅された。

「メッツ」要塞も此の日陷落した。

西部海岸方面の進擊、目標は「ボルドー」へ

「ボック」集團軍の「ホット」機械化兵團と、「ライヘル」軍とは一意西部佛國を南へ南へと進擊した。時恰も炎暑、六日間の追擊は、目も眩むで灼けつく埃の中を「ルマン」、「アンジエー」（要圖參照）街道を「ロアール」河の線に向て猛進した。途中「リール」附近で佛軍の小抵抗はあつたがこれも一蹴して、更に體力、氣力の續くかぎり突進した。直接海岸に沿ふて進擊する右支隊は、何等の抵抗も受けず「ナント」を無血占領し逃ぐる敵を追ふて南進したのである。

獨軍の快速部隊は、常に敵の退却する道路附近の前方に出て、遮斷したためこの三日間に捕虜とした佛軍は白人、黑人、混血人を混へて、最初の日に二千人翌日二千六百人更に第三日は四千人で計約九千人であつた。何れも疲勞困憊して塵埃にまみれ見る影もなき軍隊であつた。

太西洋岸「ブレスト」、「ボルドー」に到著す

六月二十三日西部進擊部隊は見事萬難を克服し、「ポメラニア」部隊は太西洋岸「ブレスト」に到著した。「ソンム」戰線から六八〇哩の進擊を續けて目的地に進擊した。戰鬪と捷利、六八〇哩の進擊の沿道には幾多の我が戰友の英靈は永久に眠つて、墓標と共に護國の神となつた。其の數は將校四、下士官以下一五〇が戰歿し、戰傷者は將校一四、下士官兵三八四名で何れも繃帶を施して輕傷者は第一線にゐる。重傷者だけは後送された。この小なる一部隊でさへ、この犧牲者を出したが、彼等の偉大なる働きは獨軍全般の爲に、多大の效果を奏したことは疑ひない。

中央進擊軍の突進！

巴里から南佛に通ずる主要街道に沿ふて邁進する「ホッペル」機械化兵團と、「キュッヘル」軍は、數縱隊となつて「ロアール」河に向つて敗走する敵を互に競ひ、爭ふて急追擊をした。困憊して潰走する敵は、空軍の爆擊と通路遮斷により、右往左往し至る所獨軍の快速部隊のため捕捉殲滅された、捕虜の數は限りがない。

中央進擊軍は速くも「オルレアン」市（ロアル河の北岸）に到達した。

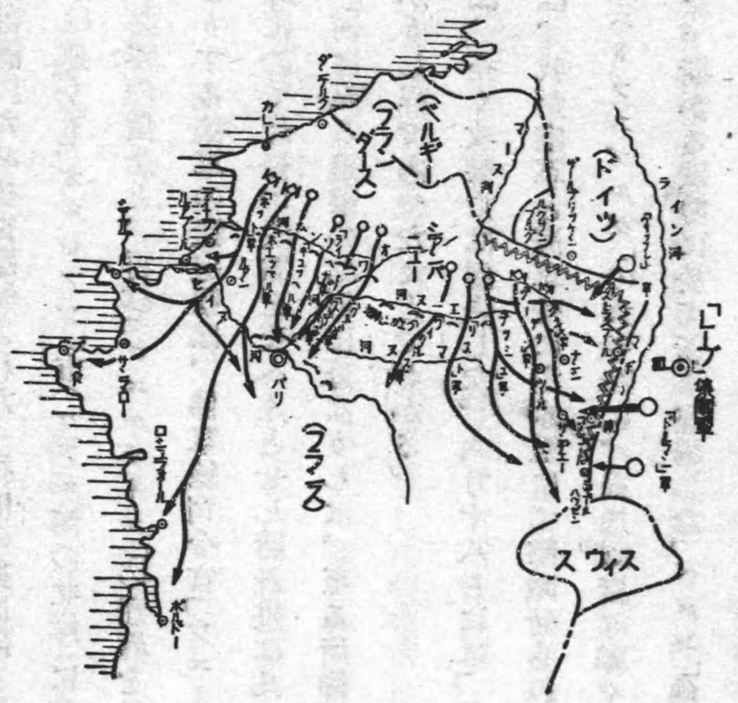
この獨軍の必勝の信念と、再び「ヴエルサイユ」の屈辱を受けざらんとする決意に滿ちた三方面よりする獨軍の猛追擊は、佛軍總司令官「ウエーガン」將軍の企圖せし「ロアール」河畔に於て最後の決戰を交へんとせし諸計畫は凡て水泡に歸した。

「ロアール」河に至る追擊の如何に急なりしは、至る所佛軍が、最早抗戰開を始する餘裕だになかりし程であつたことでわかる。

佛國軍隊は、全く攻擊力は喪失した。六月十八日には「ロアール」河口にあつた、佛の輸送船團は、我が空軍と海軍殊に潛水艦にて擊滅せられた。翌十九日には「ライン」河畔の堅塞「ストラスブルグ」の大寺院に、獨逸國旗は翩々として飜り、「ライン」の守り全く潰へた。斯かる狀勢に於て新に登場した「ペタン」佛首相は獨逸政府に對し休戰條件の提示を申込んだ。

獨軍進攻作戰要圖

（自六月五日至同十四日）



佛「ペタン」元帥の登場

佛軍は潰滅し、巴里は獨軍の爲悠々と入城せられ、「ロアール」河に最後の決戰を企圖せしも凡ては水泡に終り、今や獨軍は全佛國内に亂入し、至る處占領され、傳統を誇りし「フランス」は、全く崩壞するか、壞滅するかの、重大危機に直面した。

佛首相「ペタン」元帥

加ふるに五月十日、巴里落城の三日前に、伊太利は遂に起つて獨逸に加はて參戰し、即時伊太利領「トリノ」「イブリタ」地方（要圖參照）から佛國進擊を開始した。

「フランス」は恰かも、三方から壓迫されると云ふ窮狀に陷り、十四日國防省は戰況發

佛「ペタン」元帥の登場

表に補足して

「佛國は既に全兵力を前線に配し、一兵の豫備兵も殘さず、しかも軍需資材も頗る不足せり」

と窮狀を率直に暴露した。「レイノー」佛首相は、米國に對し再度の援助を懇請した後、「フランス」の運命を決する、重大國務會議を、在「ボルドー」の政府が召集したが、十五日の第一次國務會議は抗戰繼續か、和平かを決するに至らず、翌十六日二回に亘つて開かれたるも、論議紛々として纏らず、更に同日夜十時第四次會議を開き、白熱的論戰は、激して嗚咽するもの、罵倒する怒聲、喧々として叫ぶもの、これぞ死に直面したる人世の土壇場を現出した後、遂に「レイノー」內閣の總辭職となつた。翌十七日朝「タン」元帥を首班とし「ウェーガン」將軍を副首相兼國防相とする新內閣が出現した。

「ペタン」元帥の悲痛なる聲明

「ペタン」佛首相は組閣と同日、「ラヂオ」を通じて對獨降伏を發表、獨軍に對し「武人と武人との間の交渉」を提議すると共に、十六日夜中から佛軍の戰鬪行爲を停止したと左の聲明を發した。

余は獨軍司令官に對し、武人と武人としての交渉申入れを行ひ、十六日夜中に戰鬪行爲を中止するのやむなきに至つた。余は獨逸軍が、我々の戰鬪行爲に名譽ある結末を與へる用意ありや否やを確めるために、「ドイツ」軍との交渉を行つたのである。

然るに同日深更に至り「フランス」政府は左の聲明を公表した。

「ペタン」新首相の對獨通告は事實と相違する或る種の解釋を生ずるに至つた。「フランス」政府が「フランス」軍に對して停戰を命じたの報道は間違ひで、戰鬪は獨、佛兩軍が敵對行爲を停止する條件につき、諒解に到達するまでは續けられる」

翌十八日「ペタン」首相及び「ウェーガン」國軍總帥は全軍に對し左の如く嚴命した。

「休戰交渉成立まで斷乎抗戰を繼續せよ」と

「フランス」の休戰交渉申出に對する獨伊兩國の態度を決すべき、「ヒットラー」總統と「ムッソリニー」首相の會談は、全世界注目の裡に、獨逸の「ミュンヘン」で十八日午後四時から二時間半に亘つて行はれた。會談の內容については、單に「ヒットラー」總統と「ムッソリニー」首相は、「フランス」の休戰要求に對する獨、伊兩國政府の態度につき、完全なる意見の一致を見た」とのみの發表で詳細は判明しなかつた。從つて種々の臆測が行はれた。

獨逸は佛國に對し休戰條件を通告す

かくて獨、伊側の休戰條件は、兩巨頭會議終了後、直ちに「スペイン」政府を通じて「ボルドー」の「フランス」政府に通達された。佛政府は、十九日午前緊急國務會議を開き、その通牒を受理したが、右通牒に依れば、佛政府はまづ全權代表を任命することが要求された。右全權代表を通じて、獨逸側より休戰條件を提示されることになつてゐるのである。

「フランス」側としては休戰條件につき、協定が成立するまでは飽くまで、武器を捨てないとの方針を堅持して、「アンチジェ」將軍、「ノエル」大使等四名を獨、佛休戰交渉の全權代理として、二十一日「コンピエーニュ」に開催される休戰會議に派遣した。

これより先き、對獨休戰に承服せざる多數の佛の軍艦、並に軍用機は、佛領北阿弗利加を基地として、獨軍に抵抗すべく、六月十八日北「アフリカ」へ向かつたと傳へられ、又佛政府も、獨逸側の休戰條件の輪廓を豫斷し、それが餘り苛酷であるといふので、北「アフリカ」の自領「アルジエリア」に逃避し、そこを根據に英と協力して、回復を計るとの宣傳があつて、休戰條約協定の成立を危ぶ者さへあつた。

二六、佛の刺戟を極力回避したる休戰條件！

六月二十一日午後三時半「ヒ」總統は、「コンピエーニュ」の森に於て佛休戰委員と會見し、獨逸側の休戰條件を手交した。この歷史的會見は、過ぐる第一次世界大戰の一九

一八年十一月十一日、獨軍代表が、勝ち誇る佛の「フォシュ」元帥から、屈辱苛酷なる休戰條件を受諾せしめられたる、最も紀念すべき同一列車の中で行はれた。

「ヒ」總統が提示したる休戰協定廿四ヶ條の精神は、獨逸は將來新歐羅巴體制確立の時に當つて、禍根を殘さざるやう出來るだけ佛を刺戟せず、然かも打倒英國の初志貫徹のために必要な、そして現在獨逸がこなし得る最大の條件が盛られてあつた。即ち獨逸の覗ふところは

一、對英作戰上獨逸の戰力の增大を圖ると共に

二、英國戰力の增大を極度に阻害せんとするにあつた

會見場には「ブラウヒッチュ」、「ゲーリング」、「レーダー」、「カイテル」等の獨逸國防軍首腦部及び「リッペンドロップ」外相、「ヘス」副總理が列席した。

まづ「ヒ」總統に代り、國防軍總司令官「カイテル」將軍が佛の全權「アンチジエ」將軍以下「フランス」委員に對し、次の如く休戰條件の前文を讀みあげた。

「余は「ヒ」總統に代り諸君に告げる」

獨逸軍は一九一八年十一月聯合軍が確認した、「ウィルソン」大統領の保證に依賴して、戰鬪を停止した。これを以て獨逸國民と、その政府とが共に欲せず、且つ聯合軍がその壓倒的優勢に拘らず、遂に獨逸の陸、海、空軍を決定的に打破ることの出來なかつた戰爭は終始した。

然るに獨逸側休戰協定委員が到著すると共に、あれほどの固い約束は弊履の如く棄て去られた。かくて獨逸國民の苦難は一九一八年十一月十二日から始まつたものである！

聯國合によつて加へられた謀略の結果、我が獨逸國民は、四年の英雄的抗戰にも拘はらず、全く弱體國家となつてしまつた。これこそ民主主義政治家の獨逸に與へた、約束だつたのである。

一九三九年九月三日！　第一次大戰勃發より算へて廿五年後！

英、佛兩國は再び何等の理由なくして、對獨宣戰を布告した。

而して今や武器に依る決定が行はれた。佛軍は獨軍に敗北し、佛政府は獨政府に對し休戰條件提示を要求して來た。

獨逸は佛に休戰條件を與ふるために、この歴史的「コンピエーニュ」森を選んだ。それは「フランス」の歴史に於ける光榮ある貢を意味せず。

而も獨逸國民が絶へず、自己に加へられた最大の恥辱として、憤激して來た一切の記憶と、正義を軌道に戻すべき今回の休戰交渉に依つて、消滅せしめんためである。

佛軍は實に英雄的に抗戰を續け、刀折れ矢盡きて敗北したのである。從つて我々としては、この勇敢なる佛軍の名譽を傷つけるやうな性質の、休戰條件或は休戰交渉を行ふことを考へてゐない。獨逸の要求の目的とする所は

一、戰爭再發の防止、二、對英戰爭遂行に必要な一切の保證を獨逸に供給すること

三、「ヴエルサイユ」條約によつて獨逸に課せられた、一切の罪惡の廢棄を主要な內容とする、新平和體制の基礎を確立することである」

「カイテル」將軍が右前文を讀み終ると、「ヒ」總統は軍樂隊の奏する國歌に迎へられて列車を出で、こゝに歴史的會見は僅か十分間で幕を閉ぢた。

悲痛なる佛全權「アンチジエ」將軍の闡明!!

かくて獨、佛休戰協定は翌二十二日午後六時五十分遂に調印された。調印に先だち「フランス」側全權委員「アンチジエ」將軍は悲痛な面もちで、全權委員としての立場を次の如く闡明した。

「政府の命令に依り、休戰協定に調印するに先だつて一言したい。祖國「フランス」は運命と、武器の力に抗じ得ず、茲にやむなく戰鬪を中止するに至つたのである。「フランス」の上には非常に困難なる條件が課せられた。しかし、「フランス」は將來に於ける審議が二大隣接國をして、平和裡に生き、且働き得るやう、寛容な精神によつて、支配さるべきを期待する權利を有するものと思惟する。武人たる獨逸側全權

諸君も、今日茲に暗鬱なる瞬間を迎へた我々佛國人の、苦衷を諒察されたい」

次で同將軍は協定文に署名し、獨の「カイテル」將軍もこれに署名を終へ、こゝに歴史的な獨佛休戰協定は成立した。

休戰協定間に於ける獨軍の戰果擴大

佛「ペタン」首相と「ウエーガン」將軍の連署して、布告したる抗戰繼續は、忠實に實行せられた。敗慘の佛軍は潮の如く押寄せた獨軍に、佛國中部地方の抵抗地帶たる「ロール」河畔の各要塞、「ツール」、「エピナール」、「ルネウイーユ」によつて抗戰せしも相次で攻略せられた。

僅かに孤軍奮闘能く死守しあつた「ストラスブルグ」要塞も、連日連夜の空、陸の猛攻に力屈して降り、大伽藍の屋上には獨逸旗が飜へつた。海岸方面は佛政府が遁避した「ボルドー」の「ガロンヌ」河を隔てた對岸「ブレスト」軍港には獨軍がひし〳〵とつめかけ「トルボニユー」河上流地區に侵入を開始した。

空軍は南佛地方の飛行場を、至るところ爆擊し、各地に於て火災を起さしめ、大爆發の火焔は天に冲した。

「アルサス」、「ロートリンゲン」地區の「マヂノ」線に據つて、尙頑强に抵抗してゐた佛軍も全く屈伏した。

獨の快速部隊は長驅「リオン」市を占領し、佛の戰車七〇〇臺を鹵獲した。

六月二十三日には佛軍最後の戰鬪力は全く壓伏して茲に大終止符を告げた。

獨軍は全佛國を席捲し其の快速部隊は「ベヨンタ」南側の「スペイン」國境に達し、かくして佛國の全海峽及太西洋沿岸は獨軍の確保することゝなつた。

二七、獨軍の赫々たる戰果！

獨軍當局は七月二日第二次作戰開始以來、佛軍降伏までの一ヶ月半に亘る西部戰線に於ける綜合戰果を發表した。

その結論として「今や聯合國は壞滅した。唯一つの孤立せる敵！「イギリス」が殘るのみである」旨を强調した。

獨軍の損失

軍團長「シュペック」中將が軍團の先頭に立つて、壯烈なる戰死せる外、獨軍の損害次の如し（自五月十日至七月三日）

戰死將校以下	二七、〇七四人
行方不明（戰死認定を含む）	一八、三八四人
戰傷	一一一、〇三四人
合計	一五六、四九二人

前世界大戰の獨軍損害を述べて比較すると次のやうである。

一九一四年西部戰線にて　六三八、〇〇〇人（內戰死八五、〇〇〇人）

一九一六年「ヴエルダン」要塞攻擊にて　三一〇、〇〇〇人（內戰死四一、〇〇〇人）

一九一六年「ソンム」會戰にて　四一七、〇〇〇人（內戰死五八、〇〇〇人）

一九一八年自三月二十一日至四月十日間佛國內の大會戰にて　二四〇、〇〇〇人（內戰死三五、〇〇〇人）

鹵獲兵器（五月十日以降）

百三十五師團分の兵器、裝備等

尨大なる「マヂノ」要塞及び其の附屬設備の全部

英、佛空軍の損失推算約四千三百機

同艦船の損失約八十萬噸

この獨軍の悲慘なる犧牲も、前大戰に比し極めて僅少であるのと、功績の偉大なるに對照し、全獨逸國民の爲には信じ難き程の損害を以て佛國を屈伏せしめ得たるは未曾有の戰果であつた。

佛軍の損失

捕虜となりしもの　百九十萬以上（軍司令官、軍團長五名、將校の總數二萬九千人）

「マヂノ」要塞　佛國内の諸防禦施設は悉く破壞又は占領せられた。

佛國の全重砲、輕砲は勿論其の他尨大なる軍用倉庫貯存の武器、裝備其の他

空軍の損失（六月五日以降）

空中戰によるもの	三八三機
高射砲によるもの	一五五機
地上擊破せられたるもの	三三九機
不明のもの	一五機
計	八九二機
其の他遮斷氣球	二六　繫留氣球　一

海軍の損失

巡洋艦「キアリンシイア」	二三、〇〇〇噸
同　「スコッタウン」	一七、〇〇〇噸
軍隊輸送船「オラーム」	二一、〇〇〇噸
海軍油槽船「オイル、バイオニアー」	九、一〇〇噸
輸送船一隻	一四、〇〇〇噸
補助巡洋艦一隻	九、〇〇〇噸
其の他獨潛水艦の擊沈したる商船々腹	約四〇〇、〇〇〇噸
合　計	四九三、一〇〇噸

この莫大なる佛の損失の外休戰協定の規定により、尚殘存せる佛軍の殘部は之を爾後の戰鬪に供し得ざることゝなつた。

世界最强の陸軍と稱せられ且自ら信ずる大獨逸國の敵對者！　それは練達且勇敢に戰ひたるにも拘らず！　この獨逸史上最大の勝利を獲得し、最早聯合國は存在せず、殘るは唯一ヶの敵！　英國のみ！

獨佛休戰協定と獨の制覇權の確立

二十四ヶ條の内容は、飽くまで獨逸が打倒英國の氣魄强烈の表示しであつて、佛に對しては頗る寛容なものであつた。

獨逸國防軍總司令「カイテル」將軍が、讀みあげた協定前文中の「對英戰爭遂行に必要なる一切の保障を獨逸に提供する」第一要件として

「佛の太西洋沿岸を獨逸の對英作戰上必須の潛水艦基地、航空基地としての提供」である。

第二は經濟上としては北佛の鐵鑛を始め富有なる資源を獲得と共に、太平洋岸に沿ひて「スペイン」とも連絡し得ること。

第三は佛の占領地帶の交通、通信の機關を抑へて作戰上の利便を得、

等が最大眼目で、これによつて、戰略上の根據、經濟上長期抗戰の培養の資たらしめたのである。

一方英國の戰力增大を阻止するための手段？

勉めて佛の名譽心を尊重し其の物的、人的資源を英國側に追ひやることを避け、佛國人民を「ペタン」内閣について來られるやうに配慮した。殊に第八條の「佛海軍に對する權利の要求を提供する意圖なきことを更に嚴肅に宣言」したのは當時の獨逸が佛國艦船を利用するまでに乘員を養成してゐなかつたために潔く佛國艦船の利用を斷念し佛の心證を良くしておいて、佛艦隊を佛本國に引つけておく方策をとつた。

要するに協定の大眼目とする所は、まづ歐大陸を固めて英を衝く體制の整備で、獨空軍に對する滿々たる自信と、對英進攻の意氣を堅持したものと見ることが出來る。

伊太利の參戰と「アルプス」の進擊！

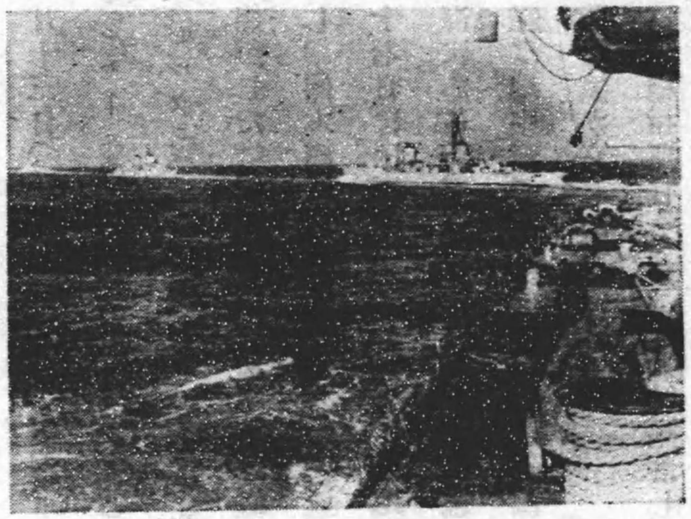
伊國皇帝と、「ムッソリニー」首相の布告！

「イタリヤ」政府は六月十一日「コンミュニケ」第一號を以て左の如く發表した。

「伊太利軍は明十二日午前十時を期し大規模なる軍事行動に出るであらう」

又同日伊太利皇帝「エマヌエル」三世は前線に於て全伊太利軍將兵に左の如き布告を發せられた。

「全伊太利亞軍將兵よ、余は伊太利王室の光輝ある傳統に鑑み、第一次大戰當時と同じく再び汝等將兵の間に伍することゝなつた。余は「ムッソリニー」首相に全伊太利軍の指揮權を深い信頼と、滿腔の期待を以て、こゝに委ね得るを喜ぶ、余は汝等將兵と共に不滅なる祖國の前途に深く思ひを致し、友邦獨逸と共に、こゝに敢然敵を撃滅せんとするものである。余は汝等將兵が烈々たる愛國心の下に協力一致、共同の目的に向つて邁進するに於ては、勝利の榮光は必ず祖國伊太利に訪れるであらうことを確信するものである」



伊太利艦隊の地中海遊戈

又「ムッソリニー」首相は六月十一日陸、海、空三軍の最高指揮官を決定すると共に次の如き布告を發した。

「余は伊太利皇帝の決定に基き、伊太利全軍最高指揮官に就任し、「バドリオ」元帥を陸軍總司令官に、「グラチアーニ」元帥を陸軍參謀總長に、「カウアニアーリ」提督を海軍司令部長に、「プリコロ」將軍を空軍參謀總長に夫々任命した。唯今より伊太利全軍一體となり、戰勝目指して邁進せんとす、伊太利皇帝に榮光あれ」

伊空軍の活躍

六月十三日(巴里陥落の前日)伊空軍は、豫ての作戰計畫に基き南佛の「ツーロン」軍港(マルセーユの東側地中海に面す)と、「チュニス」(阿弗利加の北端佛領)北端にある「ビゼルタ」軍港を空襲した。「ビゼルタ」では爆彈を投下し大火災を起さしめ、炎々天を焦がした。同地にあつた地上敵機九機に損傷を與へ、まづ地中海制空の第一歩を獲得し、佛本國と北阿弗利加との交通を遮斷した。

同十七日には再び、「チュニス」各地の飛行場を襲ひ、又「マルタ」島(伊太利の南方地中海にある英海軍根據地)の軍事施設や軍用飛行場を空襲爆擊を加へた、同日伊軍潜水艦は地中海で英巡洋艦、竝に一萬噸級の油槽船に對し水雷攻擊を加へて、英艦隊の心膽を寒からしめた。

伊空軍總指揮官「バルボ」元帥墜落して、壯烈なる戰死を遂ぐ。

六月二十八日「イタロ・バルボ」元帥は自ら空軍編隊を指揮し、南佛上空に活躍し敵軍を爆擊中、「トブルク」上空で機體より火を發して墜落、乘組員と共に壯烈な戰死を遂げた。

二八、伊太利騎兵團の「アルプス」進擊！

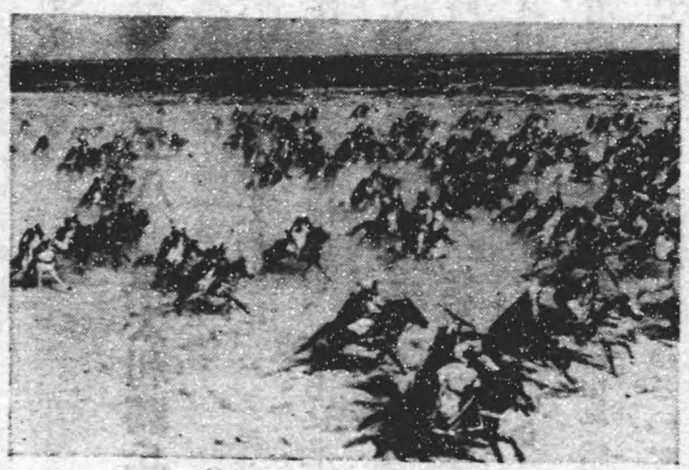
六月十三日伊太利軍は「ペデモント」の騎兵團を主力として、「アルプス」獵兵隊、山砲隊、工兵隊を配屬し、直ちに北佛に進擊すべく「アルプス」越へを始めた。天候と地嶮と戰ひ、難行した一端を述べて見よう。

時は眞夏である。猛烈な粉吹雪が、「リトル」―「セント」―「バナート」(何れもアルプス山脈の南側で「セルビン」山(標高五、二〇〇米)の南麓の街の)各市街を吹き捲り、道路と言へば、灰色の冷い憂暗に包まれ、それが新らしい兵舎の前から後の山の上まで、嵐に吹き曝されてゐるのである。

唸りを上げる北風は、「モンブラン」の峻嶺(伊、佛西北國境にある山で標高四、八一

○米我が富士山と略ぼ同高）から峰々を吹き下ろし、息も詰りそうな吹雪を見渡すかぎりの地面に吹きつけてゐる。この嵐を「オスピース」の避難小屋で避けてゐた登山家達の一人が言つた。

「標高七、二〇〇呎の處にゐては、誰だつて簡單に、今が夏だなんて言へませんよ」



伊太利騎兵集團の襲撃

佛蘭西國境の山地要塞「ラ・トラベル・セッテ」が、伊軍の進路をこの山地で阻止した。この要塞は嶮しい絶壁上に懸つて、古風な城壁で圍み、數門の大砲と機關銃を据へ付けた洞窟陣地が、處々に配置されてある。彈藥の貯藏庫も空撃を避くるため、最近巖丈な巖壁の裡に造られたのである。「ラ・トラベル・セッテ」要塞は斯くして常に難攻不落と宣言してゐたものである。

伊太利「アルプス」山砲隊

この要塞は全く岩壁と岩壁の間に巣のやうに作られて周圍は絶壁斷崖、猿でも登つて行くには困難な所で、砲彈を撃ち込んでも多くは山の後の谿に落ち込んでしまうのである。そこにゐる守備兵は山地の戰さに永年訓練されて、手剛いもの許りで、この悽い吹雪の惡天候の中でも正確に砲彈の雨を、攻者の進路に集中し得る自信がある。それに「オスピース」の背後の深谷には都合のよい橋梁があつたが最近佛の工兵によつて破壞された。

伊太利軍は攻撃を開始した、砲兵部隊は氷河の深い裂目や、洞穴、岩窟等を利用して

二八、伊太利騎兵團の「アルプス」進撃

陣地を占領した。轟々たる砲聲は眞に山谷に響き渡り、野性的で急騷な音樂の感じである。

要塞からも盛んに應射を始めた。伊太利の山砲、機關銃は咆哮をあげ、山地一帶は物凄き戰場と化した。此時突如として一大轟音が、砲火に包まれた山嶺に響き渡つた。それは雪崩が重り合ふて氷河と斷崖との上から戰場に崩れ出したのであつた。

「アルプス」獵兵隊は、この深谷、山背を繞つて、要塞の背後に殺倒した。この獵兵隊は佛の司令官が不可能と斷じてゐた、背後の氷河地帶を跋渉し多大の辛苦を克服して、遂行したのであつたが、不幸にもこの決死的運動中獵兵隊の約三分の一は雪崩のため生きながら雪中に埋められ、雪の深淵に沈み、雪、霧、雲の交錯する雪原に屍體がまるで黑點を打つたやうに、點々として横はつてゐるのがよく見える。

併し新鋭の騎兵が、其の後を引受け、要塞の側背から機關銃を浴びせ、手榴彈を投げ、塹壕の敵を一掃し、更に要點を占領した、機關銃は敵を殲滅するか、逃亡の餘儀なきに至るまで、擊ち捲くつて火を吐いた。遂に「ラ・トラベルセッテ」要塞は陷落した。

全く勇敢なる伊軍の包圍戰で攻略したのである。

これで佛國進入路の一端は開けた。

行く先きには標高八、〇〇〇呎の峻嶺が横はり、絶壁の聳ゆる峽谷が阻み、更に其の先きには新らしい山脈が重疊してゐて、山嶽地帶の行進は並大低の苦しさではない。

然し伊太利軍は前要塞の攻略と同一手段の同巧、機略の方圍、繞囘戰で「モンセニース」「モンテ・ジネブリノー」、「コルデラ」、「マダレナ」（何れも伊佛國境にある小なる街）の各堡壘を攻略した。

この間戰鬪は六月二十一日に初まり休戰條約成立の日まで、百時間を要してゐる。

この方面の佛軍は北佛方面の戰況を知らぬだけに、極めて勇敢に鬪つた。休戰條約成立の日は騎兵團が、敵の防備陣地に到る處突擊を決行してゐた時であつたが、命令一下蜿蜒脉々たる山岳幾哩に亘る戰線の段々たる轟音が突如一齊に鳴を靜めた。

二九、伊、佛休戰協定

獨、佛休戰協定調印直後「コンピエーニュ」森から、獨逸軍用機で、伊太利に向つた「フランス」側全權委員の一行は、六月二十三日午後三時「ローマ」に到著した。飛行機には「イタリヤ」新聞記者は一切立入りを禁止され、外人記者團も「フランス」側に屈辱感を與へざるため凡て會見は禁止された。

伊太利政府は二十三日午後に行はれた、伊佛休戰交渉を次の如く發表した。

「伊佛休戰交渉は「ウイラ・インチサ」で行はれた。この建物は十六世紀に建造され、現在「インチサ・デラ・ロシエッタ」公の別墅になつてゐる。午後七時「フランス」側特使團は會場に到著、續いて「イタリヤ」側主席代表「チアノ」外相以下「バドリオ」國軍參謀總長、「ガヴァニアーリ」海軍總司令、「プリコロ」空軍司令、「ロアッタ」陸軍參謀次長がそれに來場、會議は直ちに開始された。

休戰協定は六月二十五日午前二時四十五分(伊時間二十四日午後六時四十五分)調印を終了した。」

協定事項の觀察

伊、佛協定は獨佛協定と同樣、差當りの休戰條件であつた。將來の講和條件の概要とか、歐洲新秩序の容貌の如きを示すものではなかつた。

まづ伊軍の現在占領地區より進出せぬことだけは獨、佛協定と特に違ふ點であるが。それは伊軍が休戰直前、「アルプス」山脈を超へて、佛國内に足場を得、かつ佛軍の武裝解除竝に非武裝地帶の設定を協定したから、それで陸上の安全を確保するに足るとしたからであらう。

又地中海岸の「ツーロン」(南佛の軍港)、「ビゼルタ」、「オラン」(北部阿弗利加)の各軍港の武裝解除を行はしむるに止め、一時豫期された如き本國の「サヴォイ」、地中海岸等の保證占領を行はないのに見れば、伊の休戰條件はやゝ穩かであつたのである。最

も伊軍としては「非交戰時代」に佛軍の一部を南佛方面に牽制し、それだけ獨軍の作戰を容易ならしめたとは云へ、參戰後日尙淺く、戰果又大に擧り居るのではないから、この位の要求で滿足するのは當然であらう。

その他の條件として伊太利は、「ヂブチ」港及び「ヂブチ」―「アヂスアベバ」間の鐵道權利、(東阿明利加の佛領「ソマリランド」の港と「エチオピア」の首都)を收得するのであるが、同港が「アデン」灣に在つて、「フランス」と印度洋及び東洋各殖民地との中間的連絡基點をなす以上、世界第二位の殖民地帝國を有する「フランス」としては、かなり大なる損失であつた。

又佛本國(コルシカ島を含む)、「チュニジア」―「アルジエリア」(何れも阿弗利加北部佛領)及び佛領「ソマリーランド」(東部アフリカ)各殖民地に、四十八粁乃至百九十二粁の非武裝地帶を設定せしめたのは、恐らく休戰の軍事的條項といはんより、むしろ將來の講和條件をおのづから暗示したのではあるまいかと考へらるゝ、此點がいさゝか獨、佛協定とは趣を異にする點であつた。

要するに獨佛、伊佛の協定は何れも「フランス」をも、歐羅巴新秩序建設に加入せんとする意圖は明確に暗示されてゐるが、其の實現は英本土を打倒し、確實なる戰勝の上であることは言ふまでもない。

佛國民は過去の失敗を認め將來の勃興を期す

「フランス」の對獨、竝に對伊休戰協定は六月二十五日午前九時二十五分佛政府によつて全國民に發表された。この日こそは「フランス」人の歴史に忘れ得ざる一日であつた！

「フランス」人はこの日を以て心の喪に服し、カフエーも、映畫も、劇場も、商店も、食料品店以外全部閉店休業した。

軍人も兵營に謹愼し、公共建築物を始め市民は各戸に喪章を附した國旗を掲げ、衷心よりこの日を哀悼すると共に、他日の再興を誓ふのであつた。斯樣に「フランス」は既に腹を決めて、過去の失敗を認め、その酬ひに服し、敗北のどん底から、素裸になつて再起を決意した。

新聞の論調を見ても、大膽に自我の非を列擧し、勇敢に今後の困難なる途を說き、國民の忍耐と努力を要望して、世界の注目を惹いた。例へば「フイガロ」紙の如きは次の如く論及してゐた。

「數多くの子弟は空しく一身を犧牲に供した。彼等は勝利を目指して雄々しく闘つたのであつた。かくて「フランス」國民の失つたものは、獨り國民の生命と財產許りではなく、同時に世界に於ける、精神的地位迄も失つてしまつたのである。

「フラスス」國民は昨日迄は世界に於ける、審判者として高い地位に就てゐたが、今日では轉落して相抗爭する二大國民の間に板挾みとなり、その緩衝國家を形成するに過ぎない運命に置かれた。

「フランス」國民の誇りとした軍備も、政治も、文化すらも最早やその王座から引き下ろされてしまつたのだ。

これは佛國民として、耐へ難き事實である。然しながら、それが眞想なる限り、我々はこれを隱蔽することなく、勇敢率直に認識して、今後の措置を誤らぬやうに心掛け

ねばならぬ。我々は我々の悲しみの眞因をはつきりと摑んで、絶望することなく、よりよき日を建設することに努力しやう、過誤と無氣力の「フランス」は終つたのだ。明智と元氣に滿ちた、新「フランス」が生れようとしてゐるのだ」と喝破して國民に訓へた。何んたる悲痛の叫びであり、雄々しき決意であろう。

伊空軍「ジブラルタ」軍港の夜間爆擊！（伊空軍將校手記）

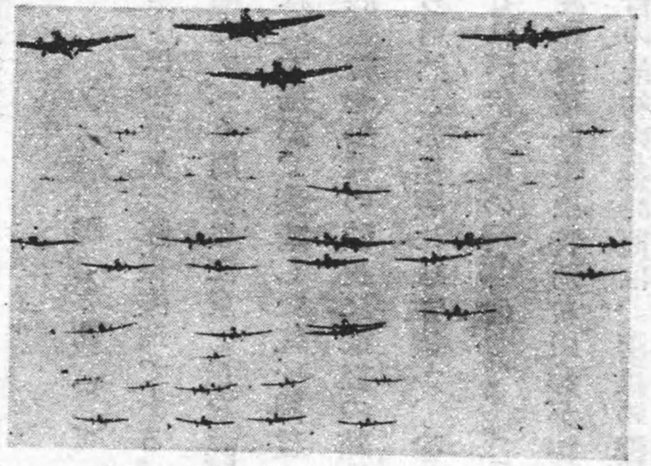
曉を衝いて

こゝは伊軍飛行隊根據地である。司令官は部下一同を集め激勵的な訓示を與へ任務に邁進すべく周密な注意をした。時は早曉であつたが、廣茫たる飛行場の遙か東方より眞紅な太陽が、素晴しい紅い圓盤のやうに立昇つた。訓示が終ると、地上勤務の諸官は、油送管や爆彈の積載に最後の點檢を加へた。巨大な鵬翼機は其の翼に陽光を受けながら肅然と亦從順に發動機が、唸聲をあげる瞬間を待つてゐた。

これが伊空軍の「ジブラルタル」攻擊に將に出動せんとする直前の光景である。今回の渡洋襲擊計畫は特別な困難が伴ふことゝなつた。それは今宵は月の出が遲いため、飛行の最初の數時間は、漆黑の闇の中を突破せねばならぬからである。

命令一下飛行隊は、沈默に包まれた。茫々たる太洋の海波の上空を、銀灰色の編隊は

最高の高度を保ちながら、「リグリア」海（コルシカ島の北方）を横斷し、襲擊目標たる「ジブラルタル」に飛翔して行つた。地平線は靜かに灰色の闇に吸込まれ、第二の豫定コースを終へてから漸くそれが微かに認めらるゝ程である。操縱士の全神經は緊張してゐる。飛行編隊は肅然として完全な隊形を保つて、恰度練習飛行をやつてゐるやうに沈著いて敵の堅陣目指して進んだ。

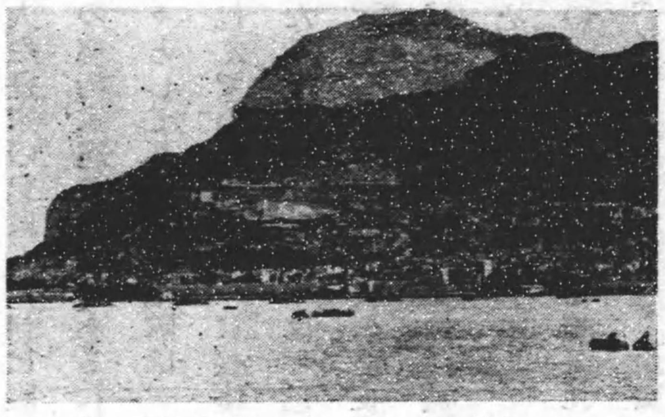


伊太利空軍の渡洋爆擊行

操縱士の前に綠がかつた燦光に照らし出された方向指針盤面に、微かにふるえてゐる指針をじつと見入つて、この不思議な助言者を絕對に信賴して天空あてどもなき進擊をつゞけるのである。今一つ高度計、傾斜測定器……、

これらの機械の働きのお蔭で操縱士は水、陸面上と何等の連絡手段も方法もない。渡洋航空に滿腔の自信と依賴を保つのである。

飛行編隊は「ペルピニアン」（佛の西南岸で西班牙との國境にある街）の上空に出た。別にこの街が眼に映つた譯ではなかつたが、相對的な位置で知れるのである。頭上の星群は愈々青白く冴え、間もなく月の銀光が行手を照らして呉れることを知らせてゐた。「ラヂオ」係と機關士は細い窓から注意深く闇を見詰めてゐるが、まだ眼に入る物は一つもない。懷中電燈の光に操縱士の二つの顏が浮び出た。重い革帽子の下の硬つた顏は潛水夫そつくりで、恰度全速力で走つてゐる潛水艇の舵を操つてゐるのと同じかつこうだ。無暗に大きい、「ヂャ



「ジブラルタル」軍港

伊空軍ジ「ブラルタル」軍港の夜間爆擊

ケッ」は差當り潛水服と言つた所である。その瞬間、昔の物語りに出る騎士の姿が、詩人や畫家の想像と一緒に腦裏に浮かんで來る。慥かに近代戰に從ふ勇士の姿には未來の藝術家達の魅力であるに違ひない。

轟々として耳を聾く編隊は、暫くして「スペイン」沿岸に出た。漆黑の闇は吾々の周圍を包んでゐて、唯所々に燈臺の光が廣汎な雲の層を貫いて微かに輝いて見える。このあたりで操縱士としては、己れの位置を確定して置かねばならぬ重大時機なのであつた。「ラヂオ」は敵が我れの夜襲を發覺するのを警戒するため、「スキッチ」を消して方向發見器の使用を禁じた。機關士の活動は愈々忙しくなつて、完全に休憩を奪はれた形となつた。

雲の一部の層を徹して朧氣に山脈の外貌が判りかかけた。それは「スペイン」南岸にある「シエラ」―「ネヴアダ」山脈の中で嶄然として高く見えるのは「ムラハセン」山（標高三五〇〇米）である。

遙か西方に當つて無數の燈火が眼に映る。「スペイン」の山村だ。愈々目指す目標に近づいた。身心共に緊張した。

吾々はまづ敵を驚愕さして、其の防戰準備を混亂せしむるため、暫く沿岸を離れ、大きく弧を描いて飛行を續けてゐた。

敵要塞たる「ヂブラルタ」は最早目睫の間に見える。各飛行機には特別信號で十二分な活躍の自由は許された。然しながら攻擊は乘組員一同の完全なる一致のもとに行はれなければならない。已にそれに必要な命令も下つてゐる。

市街の灯が見えた！　數分經つと海面を南に突出する拍車のやうな半島が眼に映つた。「ヂブラルタル」だ!!

各飛行機の乘組員の間を密接に連絡するため、機に取付けの電話が早速、操縱士と投彈手の坐席の間を前後に取換はされる。機關銃の銃口は將に火蓋を切らうとして藥色の「ベルト」は挿入された。

飛行機は地上數百呎の所まで下降した。同時に最初の第一彈は眞直に軍用術工物目がけて直擊した。命中した。轟然たる爆音がきこへた。同時に地上の敵の高射砲は唸り出して、火箭の彈丸が光の束になつて跳ね上がつて來て、吾々の飛行機周邊は勿論附近一帶は燦として空中を照明した。曳光彈である。同時に探照燈が照し初めた、數線の條光が夜の間を追ひ馳けた、壯烈なる空、陸の立體戰が展開された。

此れを以てしても英國が如何に不斷の警戒をしてゐたかを知ることが出來る。然し沿岸防備の兵も、警戒船も、我が編隊群の近接することを發見することは餘程困難であつたらしい。

それは敵が我が分隊の先陣機を發見した時は已に遲かつた。その時、我々は「ヂブラルタ」の港灣の上空で、垂直の位置にあつて、激しい爆彈の雨を彼等の頭上に降らして、地上はまるで噴火に遭つたやうに、右往左往に散亂した。而も投彈は目的物に必中してゐる。

港灣の西部には炎々として燃上る煙が見える。歐羅巴側の防戰陣地の砲口は頻りに火を吐き、我等に對し防空射擊をつゞけざまに散發した、各所にある要塞の備砲も亦曳光彈を、我が飛行編隊目蒐けて矢鱈に發射するが、遺憾ながら流れ玉に終るのであつた。

その間我が機上からは次々に爆彈は投下されていつた。

機の背後には頻りに火光が取りまいた。黃色い煙の雲、爆煙の黑雲、火の海！　まるで「ヂブラルタル」の上空と地上とは渾沌たる修羅場となつた。從つて我々の爆擊效果を確かめることも不可能となつた。

この時友軍機は敵彈にやられた！　それは機の近くで爆裂した彈丸は昇降梯子と右の翼をもぎ取つたのである。が、機は勇敢にもその儘飛行を續け、片翼で少し遲れたが無事基地に戻つて來た。

阿鼻叫喚の地獄を後に伊空軍は悠々として歸還についた。最早機を追ひかけて來る敵彈もない。色褪せた月は物憂げな光を銀の海原に投げかけてゐる。「エンヂン」は輕快

に、油も無駄なく、喉をころがすやうにその響は正確で、落著いてゐる。吾々はこれから樂しい飛行場に還つて戰友と握手するを待つ許りだ

—(終)—

昭和十六年五月十五日印刷
昭和十六年五月二十日發行

不許復製

フランダース殲滅戰
(新)定價金壹圓五拾錢

著者　舟橋茂

發行兼印刷者　東京市麹町區三番町一四　横尾民藏

印刷所　東京市牛込區市谷臺町二二　成武堂印刷所　電話四谷五七三九番

發行所　東京市麹町區三番町一四　成武堂　電話九段二八一五　振替東京三〇七一三

製本所　成武堂第二工場

教育總監部編纂

ノモンハン事件 小戰例集

▼詳細なる三色刷戰鬪圖五十葉
▼定價金七拾五錢
〒金拾貳錢

ノモンハン事件は一億國民の心膽を寒からしめ、皇軍が、かつて體驗せざる慘烈な苦戰を嘗めた、その眞相を今回教育總監部で大膽にも發表せられたのである。

如何に近代戰の特性を示唆するものであるか、又皇軍將兵が如何に至難慘烈な近代戰狀況に於て、克く其の責務を遂行し、善戰健鬪せられたるかは、本書を讀んで味ふことが出來る。

本書を讀んで誰か血湧き肉躍るの感なきものがあろう。一億國民必讀の書である。

發行所 東京市麹町區三番町 成武堂 振替東京三〇七一三 電話九段(33)二八一二 三一五一

陸軍大將 松井石根閣下序・陸軍大佐 舟橋茂殿著

獨逸電撃戰の展望

忽五版

四六判美裝二七〇頁
定價金壹圓貳拾錢 税拾錢

筆者は獨逸を知るに最も便宜の地位にあり、而して曩歳、支那事變に出征して、新戰法の生々しき體驗者の一人である。

吾人の知らんとする盟邦獨逸の偉大なる、戰果の眞髓こそ、用兵と政治の結晶であつて、決して正體の知れぬ魔法でも秘法でもない。

ドイツが如何にしてこの戰果を得たか！ 電光石火、波蘭を席捲し、英佛軍を「フランダース」の平野に誘き出して、卓絶なる統帥によつて殲滅し、遂に佛國を降伏せしめた近代兵器と、ナチス新戰法の眞相は斯書に依つて知ることができる。戰時下國民、必讀の書である。

發行所 東京市麹町區三番町 成武堂 振替東京三〇七一三 電話九段(33)二八一二 三一五一

教育總監部編纂

步兵操典註解

A列6號四百餘頁
定價 金六十五錢
〒 金九錢

步兵操典は、國民學校生活から、大學の學生に至る迄この書によつて學校教練の眞髓を會得し、軍隊では入營してから立派な皇國軍人とならねばならぬ。陸軍當局に於ては「この操典は全國の青少年は勿論、女學生迄も讀んで貰いたい」と希望して居らるゝのである。

敢て如上の各位の必讀をお薦めする。

發行所 東京市麴町區三番町 成武堂 振替東京三〇七一三 電話九段(33)二八一二五

904
281

SB

¥1.50